

ライプツィヒ大学を歩いてみよう

ドイツ アカデミック街道を歩く

丹野義彦 (東京大学教養学部心理・教育学部会)

絵解き 地図と写真による大学入門

ドイツ アカデミック街道を歩く

ドイツ各地の大学を訪ね、歴史・学問・社会とのかかわりなどを紹介したい。大学散歩の面白さを伝えるために、私はアカデミックツアーとして、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の4部作を刊行してきた(星和書店および有斐閣)。これからドイツ編をお届けしたい。私はこれを「ドイツ・アカデミック街道」と名前をつけた。ハイデルベルクの次はライプツィヒをとりあげたい。

学問発祥の地

ライプツィヒは、人口58万人の都市で、旧東ドイツではベルリンにつぐ第2の都市だった。

ライプツィヒは、バッハやメンデルスゾーンなど音楽の都として有名である。ほかにも、出版業の地、ゲーテ街道の終点などとして知られている。

ライプツィヒは大学の街であり、いろいろな学問の発祥の地でもある。ライプツィヒ大学は心理学の発祥の地である。その背景には、ウェーバーやフェヒナーによる精神物理学や、ハインロートやフレヒジヒ、クレペリンなどによる精神医学の発展がある。さらには、数学者のメビウスやクライネ、物理学のハイデルベルクが活躍し、これらの学問のルーツとなった。日本からの留学生も多く、森鷗外、朝永振一郎、池田菊苗、滝廉太郎など多くの人がライプツィヒで勉強・研究をした。

本稿では、旅行ガイドブックにはほとんど取りあげられないことのないライプツィヒ大学を散歩し、この町の学問・文化・音楽に触れてみたい。

ライプツィヒの場所



ライプツィヒはドイツの東部の大都市である。鉄道地図に示すように、ベルリンとミュンヘンを南北に走る路線と、フランクフルトとドレスデンを東西に走る路線が交わる場所にある。交通の要所である。こうした地の利を生かして、ライプツィヒは商業の地として、古くから栄えていた。列車ではベルリン、ドレスデン、ワイマールから電車で1時間強で着く。

飛行機を利用する場合、ライプツィヒ空港に着き、空港エクスプレスで15分ほどライプツィヒ中央駅に着く。中央駅は巨大である。地下1階と2階が巨大なショッピングモールになっている。

ライプツィヒの街

ライプツィヒ中央駅が、地図の右上にある。ライプツィヒ中央駅は、旧市街に接している。

旧市街は、「リング」と呼ばれる環状の道路に囲まれている。リングには路面電車（トラム）が走っている。この「リング」は、ライプツィヒ市内の位置関係を表すのに便利である。「リング」の形は、後の地図でもたびたび出てくるので、覚えておいていただきたい。

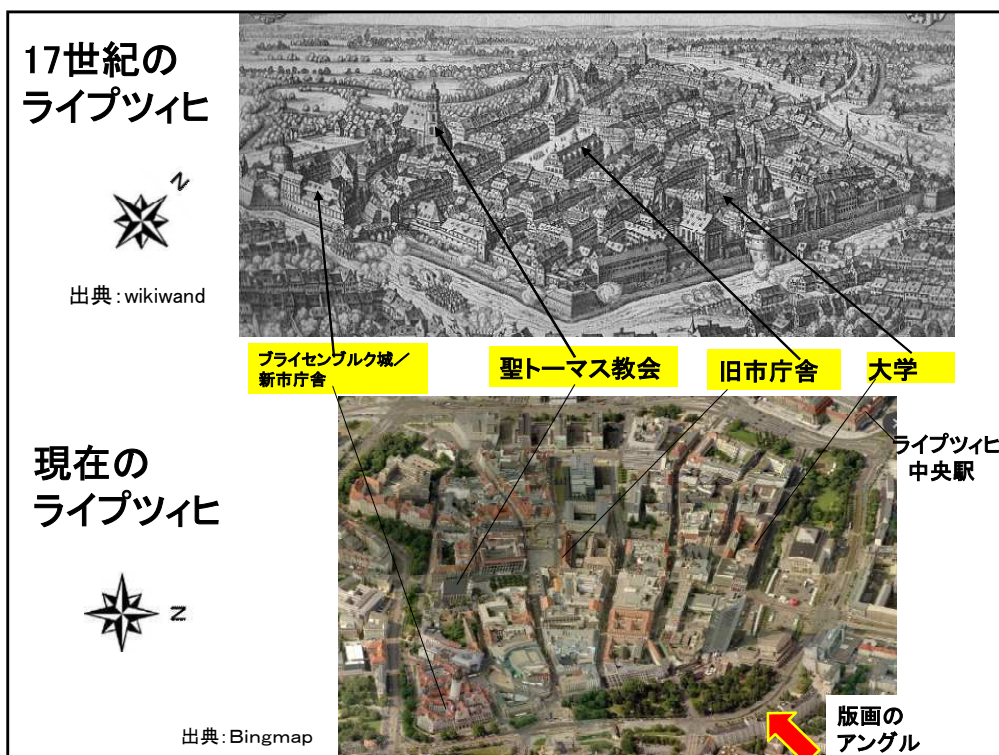
リング内の旧市街は、ほぼ1キロ四方であり、かなり狭い。旧市街だけならば歩いて散歩できる。

ライプツィヒの歴史

ライプツィヒの歴史を簡単にまとめてみる。ライプツィヒという地名は、ドイツ史にも何回か顔を出す。1519年のルターのライプツィヒ論争、30年戦争のライプツィヒの戦い、1813年のフランス軍との戦い、1989年の東ドイツ開放の出発点となったライプツィヒのデモ。

ライプツィヒの歴史

7世紀	町ができる
12世紀	神聖ローマ帝国の商都として発展
1409年	ライプツィヒ大学が作られる
1519年	ルターとエックとの宗教論争（ライプツィヒ論争）
17世紀	30年戦争の戦いの場になる。ライプツィヒ郊外リュッツェンの戦いで、スウェーデン王グスタフが戦死した
1813年	ライプツィヒの戦いでナポレオン軍と戦い、追い出す
1949年	第二次大戦後、ソ連軍に占領され、東西分割により、東ドイツ領となる
1989年	ライプツィヒのニコライ教会での集会がデモに発展し、それがベルリンの壁崩壊につながる「東ドイツ平和革命」の端緒となった。ドイツ統一により、旧西ドイツに統合された。



この図は17世紀のライプツィヒを描いたメリアンの版画である。当時は、30年戦争の真っ最中であり、ライプツィヒは軍事要塞であった。絵にみられるように、ライプツィヒは四角形の城塞であった。四面を城壁が囲んでいる。城壁の上には高い建物がたっていて、簡単には侵入できない。城壁の外側は堀で囲まれていた。堀の外側には、広い平地が確保され、そこで軍隊が訓練をしている。その平地の周りを民家が囲んでいる。

城壁の四方の各面には、橋がかかっていて、入口の城門が立っている。

現在の地図と比べると、よくわかる。城壁はなくなった。城壁の周りの広い空間が、現在の「リング」という環状道路になったことがよくわかる。

当時の建物と現在の建物が対応できる。当時のフライセンブルク城は、現在は新市庁舎の建物になっている。聖トーマス教会（バッハがいた教会、後述）。当時はもっと大きな塔が立っていた。現在も塔が立って

いる。旧市庁舎はそのまま残っている。

大学の位置もほぼ特定できる。17世紀の版画の右下にある城門が、現在のオペラ座のあるアウグストゥス広場のあたりである。その奥の建物がライプツィヒ大学であろう。

現代のライプツィヒ

1989年に東西ドイツは統一され、ライプツィヒは社会主義から資本主義の町へと変わった。

私がライプツィヒを訪ねたのは、2005年と2012年のことである。2005年の時は、まだ東ドイツ時代の名残があった。ライプツィヒ大学はカールマルクス大学と呼ばれ、大学の前にはレーニンの巨大なレリーフがあった。しかし、2012年に行った時には、ずいぶん変わっていた。レーニンの像はなくなった。新しいビルが増え、マリオットなどのアメリカ系の大きなホテルも駅の前に立っていた。中央駅の地下のショッピングモールも、ずっと活気があふれているように思えた。東ドイツ時代とその後の低迷期を越えて、経済的に発展しているのだろう。

ライプツィヒの路面電車（トラム）

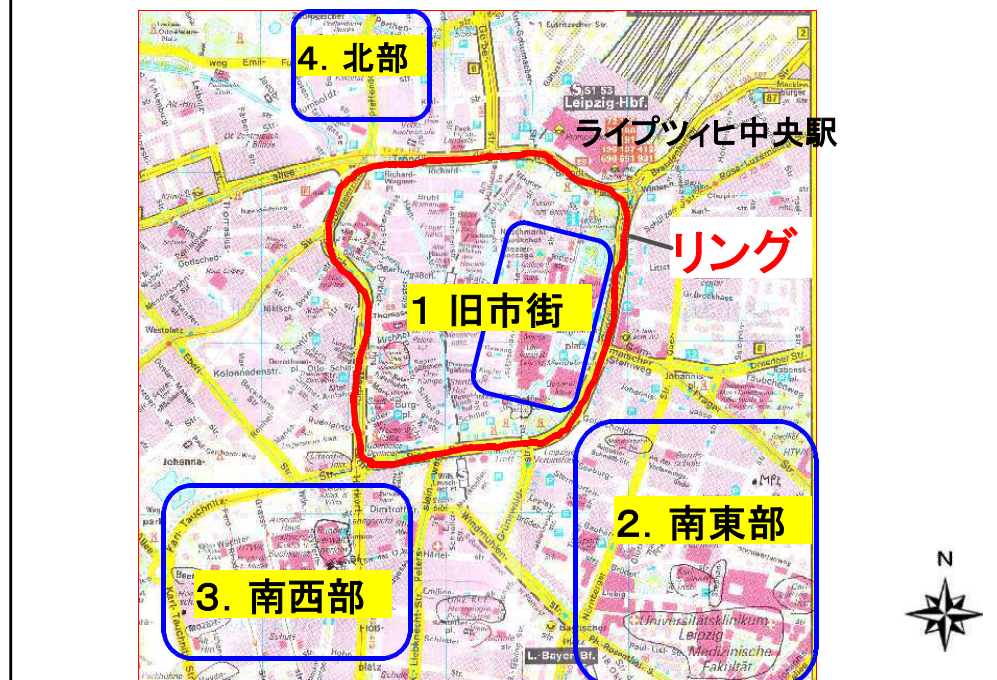


リングを中心に放射状に路面電車（トラム）の路線が出ている。簡単なので、すぐに乗りこなすことができる。まず路線番号と駅名を調べればよい。トラムの地図は、ホテルのフロントや観光案内所でもらえる。

一日券を停留所で買うとよい。一日券は、最初に乗った時に時刻を刻印したら、あとは乗り降りするだけ。切符をチェックされることもない(時々検札の人が乗り込んでくるらしいので、切符は買わないといけない)。

ライプツィヒ大学を4つに分けて歩く

ライプツィヒ大学を4つに分けて歩く



ライプツィヒ大学の歴史

ライプツィヒ大学は1409年に創設された。ドイツでは、ハイデルベルグ大学（1386年）に次いで、2番目に古い歴史を持っている。ドイツ国内では、イエナ大学やベルリン大学のバンカラ気質に対して、ライプツィヒ大学はハイカラ気質であったという（『ドイツの大学』潮木守一、講談社学術文庫）。

この大学で教員をした人には、物理学のハイゼンベルグ、数学のクラインやメビウス、精神物理学のウェーバーやフェヒナー、心理学のヴントなどがいる。この大学で学んだ人には、ゲーテ、ニーチェ、デュルケーム、シューマン、ワーグナーなどがいる。日本人留学生も多い。森鷗外、朝永振一郎、瀧廉太郎、池田菊苗、井上哲治郎などである。

東ドイツ時代には、「カール・マルクス大学」と呼ばれていたが、ドイツ統一後はライプツィヒ大学へと戻った。現在は14の学部をもち、学生数3万人の大きな大学である。

ライプツィヒ大学は、ひとつの大きなキャンパスを形成することがなく、大学の建物は市内に分散している。ここでは、地図に示すように、以下の4つの地域に分けてライプツィヒ大学を回ってみよう。ここに紹介する施設は、半日～1日あれば歩いて回ることができる。

<目次>

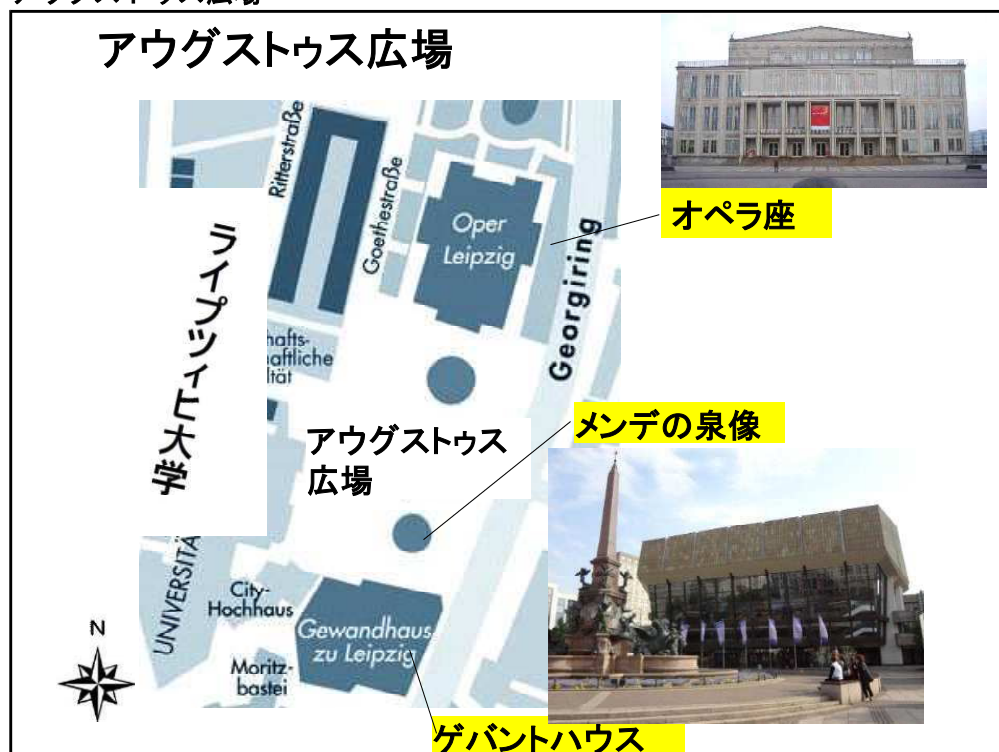
1章	旧市街（リング内）
2章	南東部
	2-1. 医学部・大学病院（ベイリッシャー広場駅）
	2-2. 自然科学系学部（ヨハンニスアレー駅）
	2-3. 精神科、獣医学部（ドイツ図書館駅）
3章	南西部
4章	北部

第1章 旧市街



まずは旧市街から回る。
アウグストゥス広場の西側にライプツィヒ大学本部がある。

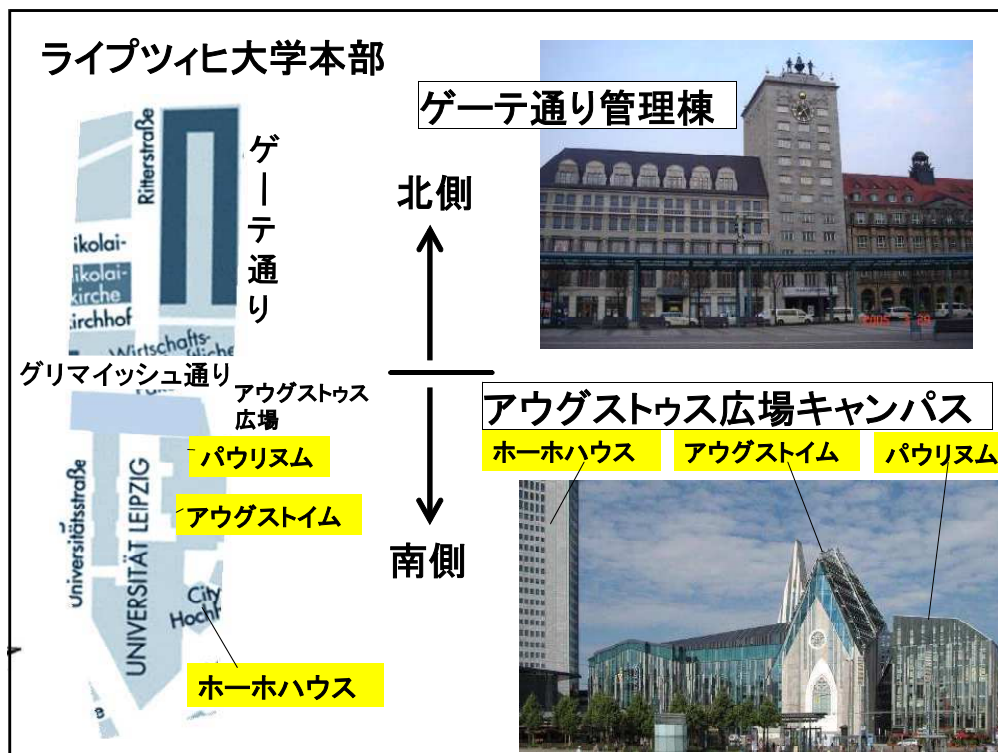
アウグストゥス広場



トラムでアウグストゥス広場駅で降りる。アウグストゥス広場は、ライプツィヒ中央駅から歩いて5分ほどである。

アウグストゥス広場は、その空間的な構成に圧倒される。巨大な建物が三方を囲む。①オペラ座、②ゲバントハウス、③ライプツィヒ大学本部である。ゲバントハウスとは、250年の歴史をもつゲバントハウス・オーケストラの本拠地である。広場には、メンデの泉という像がある。

ライプツィヒ大学本部



ライプツィヒ大学本部は、グリマイツシュ通りで南北に分かれる。

北側はゲーテ通り管理棟と呼ばれる。時計台のある古典的なデザインの建物である。間にゲーテ通りをはさんで、オペラ座の建物に隠れてしまい、あまり目立たない。

これに対して、南側の建物は、アウグストゥス広場キャンパスと呼ばれる。いくつかの建物からなる。写真のように、北側がパウリヌムである。真ん中がアウグストイムと呼ばれる三角屋根のある変わったモダンなデザインのビルである。

南側の高層ビルはホーホハウスである。このビルは、東ドイツ時代にライプツィヒ大学の建物として作られたが、現在ではテレビ局などの一般企業が入っており、大学の施設ではない。ホーホハウスは、高層ビルで、ライプツィヒ市街のどこからでも見えるランドマーク・タワーの働きをしている。上には展望台もあるらしい。

ライプツィヒ大学本部 北側 ゲーテ通り管理棟

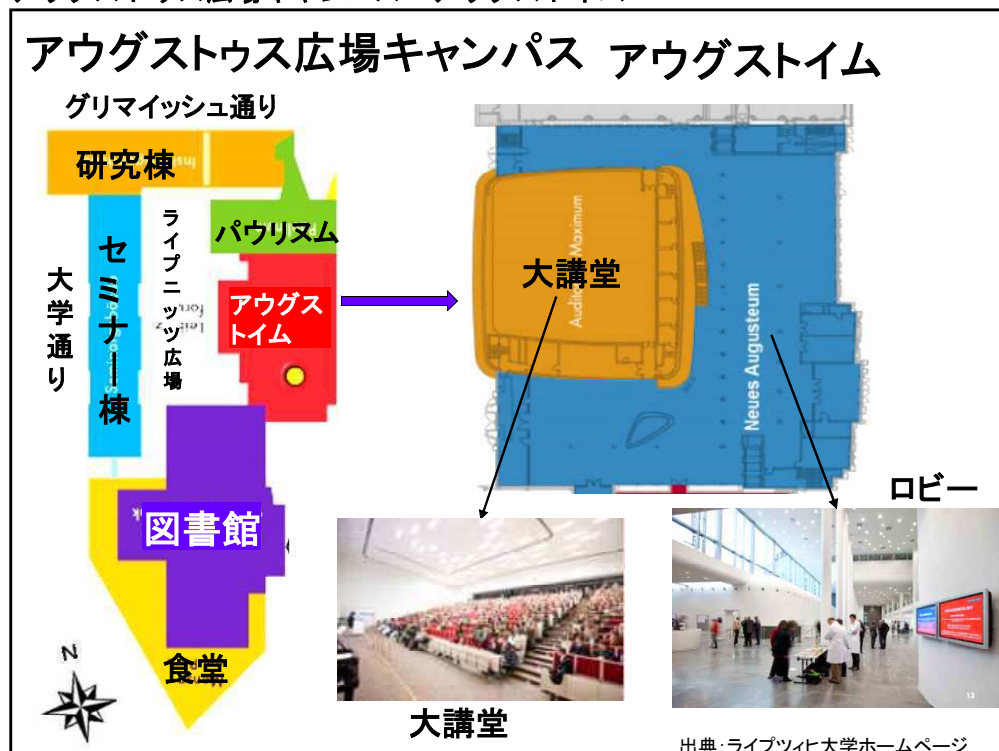
ライプツィヒ大学本部 北側 ゲーテ通り管理棟

ライプツィヒ大学本部 北側 ゲート通り管理棟



北側の管理棟は、時計台のある建物で、その上には鐘がある。両側の2人の像が、鐘を叩いている。おもに、学生サービスの機関が入っている。学生はこちらのビルには出入りしていない。

アウグストゥス広場キャンパス アウグストイム



出典:ライプツィヒ大学ホームページ

南側の建物には、学生であふれている。左の図に示されるように、いくつかの建物からなる複合体である。パウリヌム、アウグストイム、研究棟、セミナー棟、図書館（食堂）の6つの部分からなる。順に見ていこう。

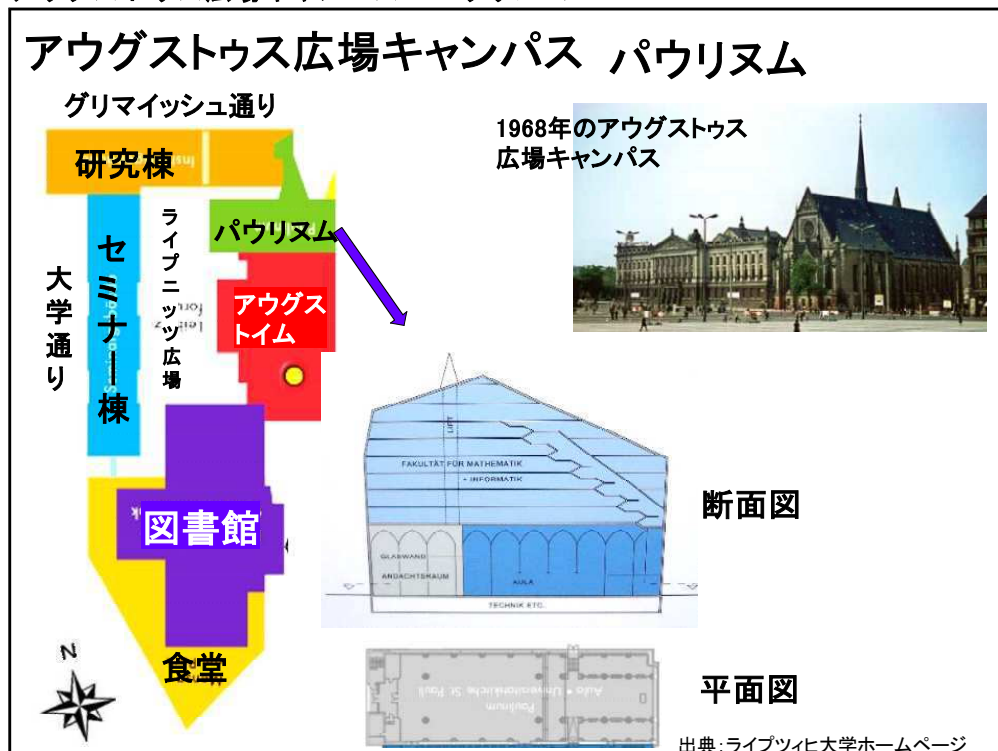
アウグストイムは、このキャンパスの中心であり、ここで講義が行われる。外観は三角屋根の教会風の大きなビルである。

西側に大きな講堂（オーディトリウム・マキシムム）がある（真中の写真）。

東側は吹き抜けのロビーである（右下の写真）。



2005 年に来た時は、以前のアウグストイムの前には、レーニンの肖像の入った巨大なレリーフが飾られていた。いかにもカールマルクス大学というふうだった。しかし、2007 年に撤去されたという。レーニンの顔は早く忘れたかったのだろう。

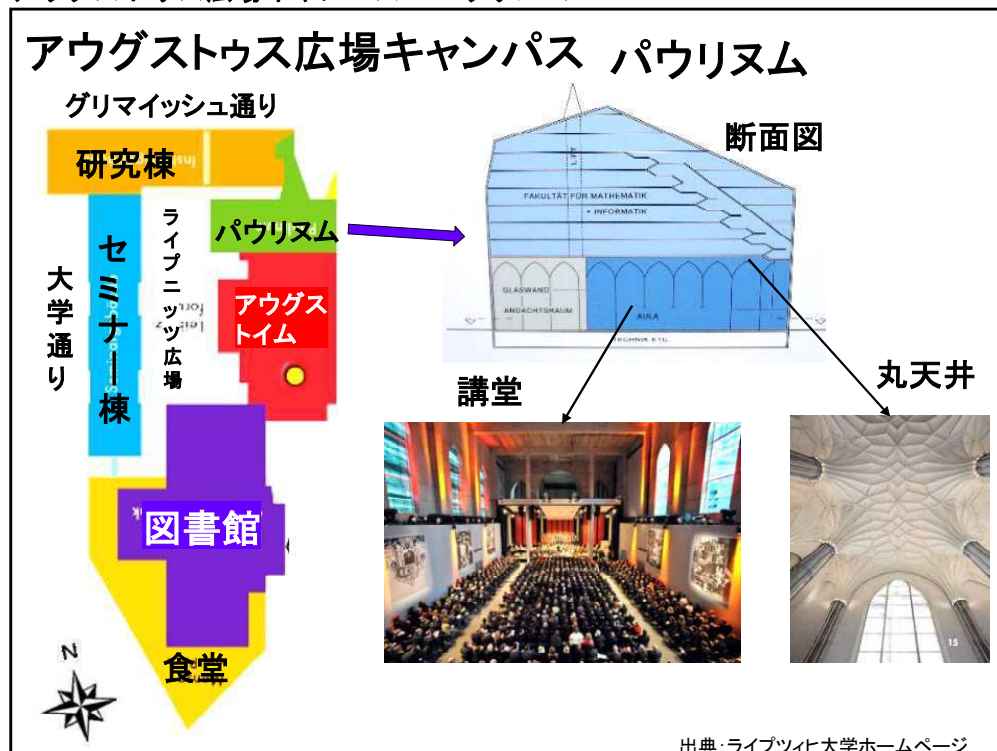


パウリヌムという建物は、この地に建っていたパウリ教会の名前にもとづいている。13 世紀に、この地にパウリ教会が立てられた。1543 年に、この地は大学の所有になり、コレギウム・パウリヌムと名づけられた。1546 年に新しい建物になり、医学部が使用した。1704 年には、解剖学教室（解剖学シアター）が中に作られた。第二次大戦で破壊されたが、戦後にカールマルクス大学の本部として立て替えられた。

右上の写真は 1968 年のものである。右側の高い塔を持つ建物がパウリ教会（旧パウリヌム）であり、左側が旧アウグストイムである。

2007年にこの建物は取り壊され、現在の新パウリヌムと新アウグストイムが建てられた。
 新パウリヌムの外観は、前の写真にみられるように、教会らしくない。古いパウリ教会の正面やバラ窓の形は、新パウリヌムではなく、新アウグストイムのほうに残されている。これは少し不思議なことである。
 右の図は新パウリヌムの断面図と平面図である。
 パウリヌムは、後述の音楽軌道のチェックポイントになっている。

アウグストウス広場キャンパス パウリヌム



新パウリヌムの内部についてみる。
 断面図を見ると、1・2階は講堂（アウラ）になっている。3階以上が教室である。
 左下の写真は、講堂の内部である。2009年に、ライプツィヒ大学創立600周年記念式典がおこなわれた時の写真である。このときはまだ建設中で、内部の天井などが未完成のまま、式典がおこなわれた。
 現在は完成して、天井は、教会のように、丸天井になっている（右下の写真）。

アウグストウス広場キャンパス 図書館 食堂



アウグストイムの南側には、図書館と食堂がある。
 図書館は 3000 席があり、コンピュータプール（上の写真）も備えられている。
 食堂は、公園側食堂と呼ばれる。キャンパスの南側は公園になっている（モーリッツ城壁という昔の城壁の一部が残っている）。
 左下の写真は、南側から見た外観である。南側は三角に尖った形をしている。
 右下は食堂内部である。鋭角の空間だが、1000 席ある。



アウグストイムの北側には、研究棟がたっている。この建物は、グリマイツシュ通りに面している。写真は、グリマイツシュ通りからみた研究棟であるが、4階建ての普通のビルである。ここには大学の多くの学部の研究室が入っている。しかし、グリマイツシュ通りは、マルクト広場とアウグストゥス広場を結んでおり、観光客が多く歩いているので、喧噪に包まれている。しかも 1 階は貸店舗である。

その南には、セミナー棟（左下の写真）がある。5階建てのふつうのビルで、81 の教室・セミナー室が入っている。また、ここに、次に述べる数学科の数学研究所が入っている。

セミナー棟の西側は大学通りである。

アウグストイムの西側は、ライプツィヒ広場（ライプニッツ・フォーラム）という中庭になっている。右下の写真は、ホーホタワーからライプツィヒ広場をみたところである。

哲学者のライプニッツ（1646 ～ 1716 年）は、ライプツィヒ大学で数学を学んだ。

数学の有名教員（ライプツィヒ大学）

数学の有名教員(ライプツィヒ大学)



ウイドマン



レティクス



ケストナー



メビウス



ヘルグロッツ



ヴェルデン



ケーラー



ノイマン



ハンケル



マイヤー



リー



クライン



ヘルダー



ハウスドルフ



リヒテンシュタイン

有名な卒業生



ライプニッツ



フルヴィッツ



テレルファル



アルティン



ウイントナー



チョウ

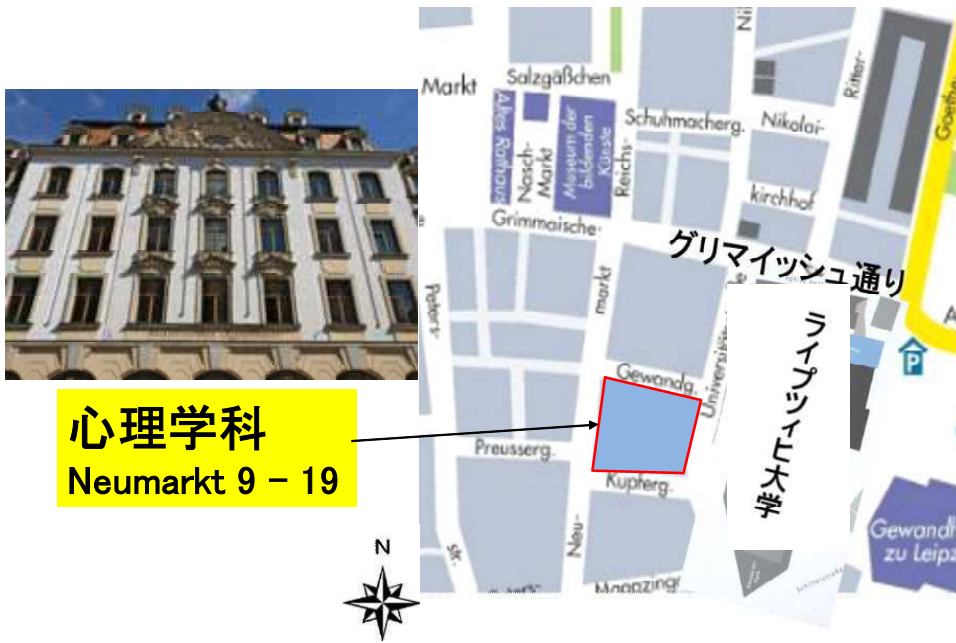
出典:ライプツィヒ大学ホームページ

アウグストウス広場キャンパスのセミナー棟の中に、数学科の数学研究所がある。住所は Augustusplatz 10 数学科のホームページをみると、ライプツィヒ大学の数学の有名教員が並んでいる。

そこには、ウイドマン、ゲオルゲ・レティクス、ケストナー、メビウス、ノイマン、ハンケル、マイヤー、リー、クライン、ヘルダー、ハウスドルフ、リヒテンシュタイン、ヘルグロッツ、ヴェルデン、ケーラーがあげられている。メビウスの輪のメビウスとか、クラインの壺のクラインとか、門外漢でもきいたことのあるような数学者が並んでいる。

さらに、有名な卒業生として、ライプニッツ、フルヴィッツ、テレルファル、アルティン、ウイントナー、チョウがあげられている。

ライプツィヒ大学心理学科



心理学科

Neumarkt 9 - 19

ライプツィヒ大学の心理学科は、実験心理学の発祥の地とされる。ヴントが世界で初めて心理学実験室をここに作ったからである。

心理学科の場所は、本部とアウグストゥス広場キャンパスのすぐ西側である。住所は Neumarkt 9 - 19。地図に示すように、西側はノイマルクト通りで、東側はユニバーシティ通り、北側がゲヴァントゲスヒェン通り、南側がクップファー小道にはさまれた区画である。

ヴントから実験心理学が始まった

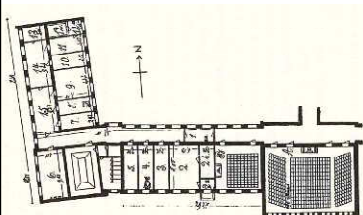
ヴントから実験心理学が始まった

ヴント



1909年のヴントの実験心理学研究所

左からFriedrich Sander, Otto Klemm, Ottmar Dittich, Wilhelm Wirt, Wilhelm Wundt (椅子), Hartmann(助手)



荻坂良二 わが国初期の心理学実験室
心理学評論 30, 473-493, 1987

出典: wikipedia

ヴントは実験心理学の創設者といわれる。ヴントが世界で初めて心理学実験室を作り、それによって心理学は哲学から分かれて、自然科学としての心理学への道を歩くことになった。実験心理学の道を辿れば、すべてライプツィヒに通じるといわれる。

ヴィルヘルム・ヴント (1832 ~ 1920 年) は、ドイツの中南部で生まれ、チュービンゲン大学、ハイデ

ルベルク大学、ベルリン大学で学び、ハイデルベルク大学で医学の博士号をとった。26 歳からハイデルベルク大学の生理学者ヘルムホルツの助手をつとめた。1864 年に、32 歳でハイデルベルク大学の准教授（人類学・医学心理学）となった。1875 年、43 歳で、ライプツィヒ大学の哲学教授となった。後に大学の副学長を務め、88 歳で死ぬまでライプツィヒに住んだ。

ヴントは 1881 年には、心理学の雑誌「哲学研究」を創刊した。彼は、①生理学や知覚など、個人の意識を扱う「個人心理学」と、②個人を越えた文化を扱う「民族心理学」に分け、膨大な著作を残した（生涯で 5 万ページ以上を書いたという）。

当時のライプツィヒ大学には、感覚生理学のウェーバーとフェヒナーの影響が強く、ヴントは、精神物理学実験と内観法を組み合わせ、実験心理学の方法論を作った。そして、1879 年には、ライプツィヒ大学に心理学実験室を作った（左下の写真）。この 1879 年は、実験心理学が哲学から独立した年とも言われる。

右の写真は、ヴントの同僚たちとのものである。左から Friedrich Sander, Otto Klemm, Ottmar Dittrich, Wilhelm Wirt, Wilhelm Wundt (椅子), Hartmann(助手)である。

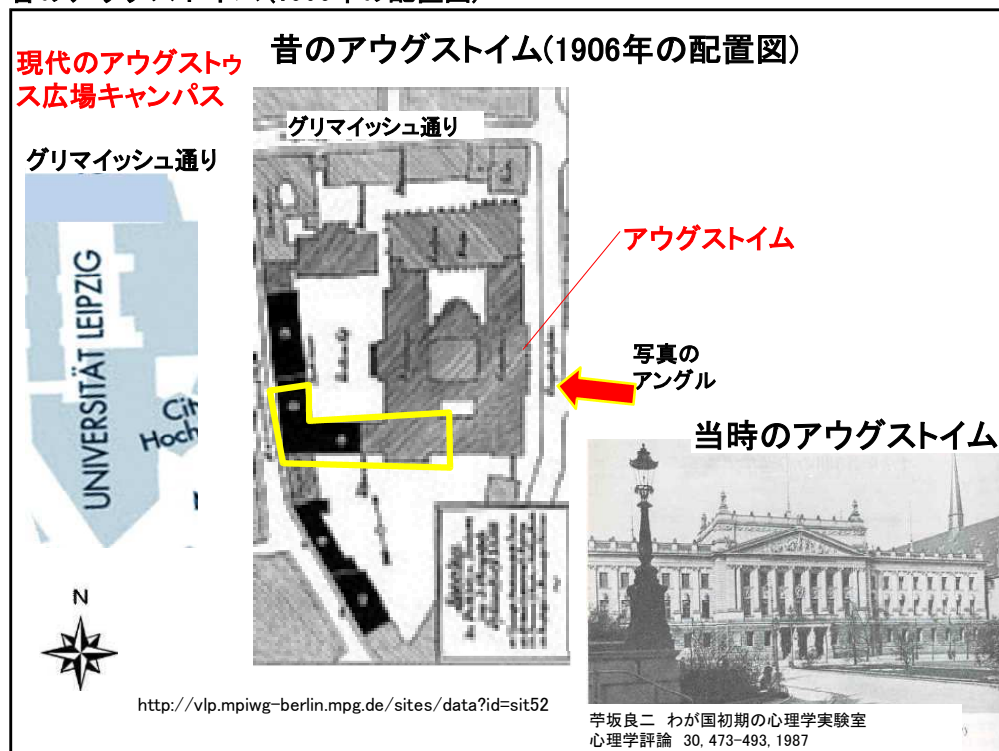
ヴントの実験室はどこにあったか

ヴントの実験室は、現在のライプツィヒ大学の本館のあたりにあった。

1875 年にヴントが初めて実験室を作ったのは、神学生寮（コンビクト）という建物だった。神学生寮は、アウグストゥス広場のメインビルにあり、実験室は、東南の一角の 2 階に位置していたという。

そして、1896 年には、大学本館アウグストイムが完成し、そこに心理学実験室が移った。

昔のアウグストイム(1906年の配置図)

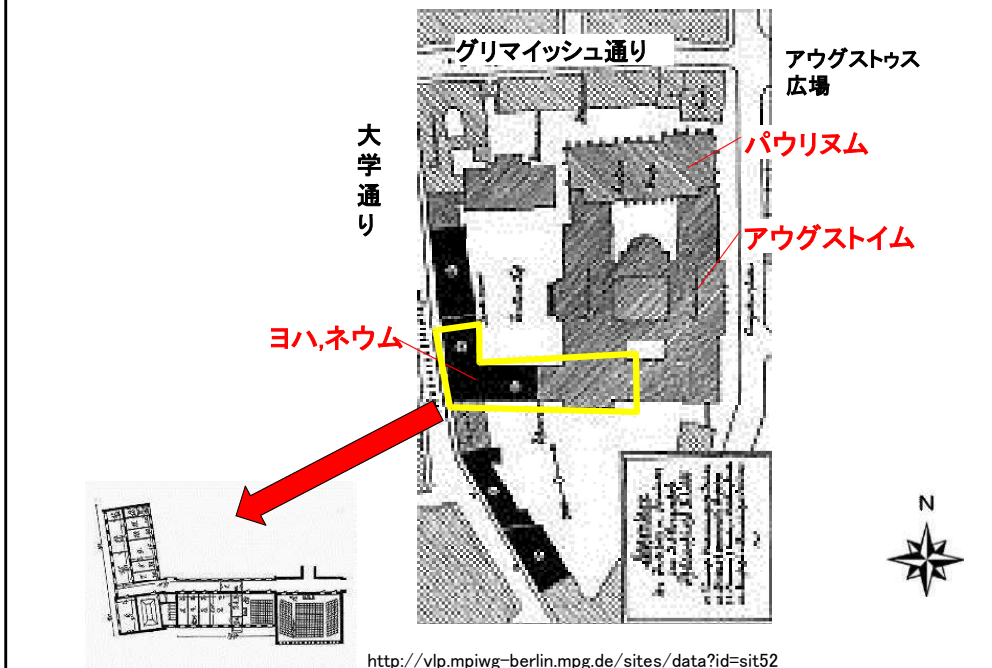


この配置図は、1906 年当時のアウグストイムである。現在のアウグストゥス広場キャンパスと同じ場所に建てられていることがわかる。写真からわかるように、表側は壮麗な建物である。

この建物の 2 階の裏に実験室が作られた。黄色の線で囲んだ部分である（後述）。

ヴントの実験心理学研究所(1906年の配置図)

ヴントの実験心理学研究所(1906年の配置図)



この図は、当時のアウグストイムを拡大したものである。

中央には、アウグストイムがあり、その北側にはパウリヌムという建物（パウリ教会）がある。

アウグストイムの西側には、棟続きでヨハンネウムという建物がある。この建物は大学通りに面していた。

ヴントの実験室は、2階にあり、このヨハンネウムとアウグストイムにまたがるように作られていた。黄色の線で囲んだ部分である。

松本亦太郎は、『実験心理学十講』（弘道館、1928）の中で、1899年にヴントの「心理学実験場」を訪問した時のことを書いている。それによると、ヴント教授は「ベルリンを見たか、ベルリンは大都会だ」などとベルリンの自慢をして、実験室の見学は弟子に任せたという。

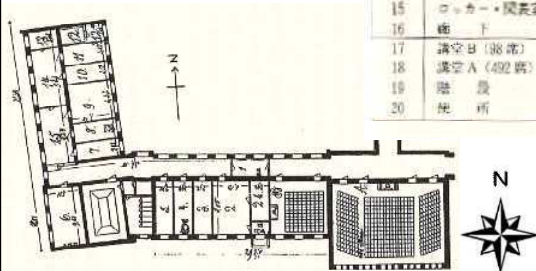
ライプツィヒ大学の「心理学研究場は大学建物のヨハンネウムと名くる東南の一角の二階を以て之に充て、室の数は大小合わせて十四箇許りあり」としている。

ヴントの実験心理学研究所

ヴントの実験心理研究所

表1 Leipzig 大学心理学実験室 (1886-1944) の各室とその面積 () は平版の推定

室番	室	南北 (m)	東西 (m)	平方 (㎡)	坪	畳帖
1	小実験室 (新室)	(2.78)	(5.79)	16.10	4.83	
2a	ヘリオスタット室	(2.06)	2.94	6.12	1.84	
2b	暗 室	(6.72)	2.94	19.76	5.93	
2	聴覚研究室	8.80	6.13	53.94	16.18	
3	所長室	8.80	2.94	25.90	7.77	
4	視覚 (鏡像器) 室	8.80	2.94	25.90	7.77	
5	視 覚 室	8.80	2.75	24.2	7.26	
6	学務室・会議室	9.81	5.21	51.1	15.30	
7	新所長室	2.92	7.10	20.7	6.21	
8	聴 覚 室	3.12	7.10	22.2	6.66	
9	聴 覚 室	6.37	7.10	45.2	13.56	
10	一般実験室	3.12	7.10	22.2	6.66	
11	一般実験室	3.12	7.10	22.2	6.66	
12	鈴 音 室	3.06	(4.45)	13.6	4.06	
12a	暗 室	3.06	(2.65)	8.1	2.43	
13	小工作室	3.06	(4.50)	13.8	4.14	
14	図書・読書室	9.63	(4.50)	43.3	12.99	
15	ロッカー・図書室	9.24	(4.50)	41.6	12.48	144.0
16	廊 下	2.78	(31.31)	87.0	26.10	170.1
17	講堂B (38席)	8.80	(9.26)	81.5	24.45	194.5
18	講堂A (492席)	13.43	(18.06)	242.55	72.77	297.3
19	階 長	9.81	(6.12)	59.0	18.00	285.3
20	使 所	8.80	(4.40)	38.7	11.61	296.9



荻坂良二 わが国初期の心理学実験室
心理学評論 30, 473-493, 1987

荻坂良二氏は「わが国初期の心理学実験室」(心理学評論 30, 473-493, 1987)の中で、ヴントの心理学実験室の各室の大きさを推定している(右の表)。東のアウグストイムの側には、大きな講義室が2つ書かれているが、ここは管轄外だった。したがって、実験室はヨハネウムの側の部屋だけである。西側の実験室は、大学通りに面していて喧噪であったが、東側は中庭に面していて静かだった。

しかし、この大学本館アウグストイムやヨハネウムやパウリウムは、1944年の大爆撃で破壊されてしまった。したがって、現在は、ヴントの実験室は存在しない。現在の新アウグストイムや新パウリウムについては前述のとおりである。

荻坂(1987)によると、ライプツィヒの実験室の面影は、千葉胤成が作った東北大学の心理学研究室に残っていたという。これは、東京大学、京都大学について、日本に3番目にできた心理学実験室であるが、この建物もすでにない。

ヴントの先駆者 ウェーバーとフェヒナー

ライプツィヒでのヴントの先駆者

ウェーバー

フェヒナー



ウェーバーの法則

$$\frac{\Delta S}{S} = \text{一定}$$



出典: WIKIPEDIA

ヴントが活躍した同時代のライプツィヒ大学には、ウェーバーとフェヒナーという2人の先駆者がいた。ヴントが心理学を哲学から離陸させるためには、ウェーバーやフェヒナーのような生理学の背景がどうしても必要だったのである。

ウェーバー

ウェーバーの法則で有名なウェーバーは、精神物理学の創始者の一人である。

エルンスト・ウェーバー（1795～1878年）は、ヴィッテンベルクに生まれ、ヴィッテンベルク大学で医学を学んだ。1815年にナポレオン戦争でライプツィヒに避難し、以後はライプツィヒに住んだ。1818年からライプツィヒ大学の比較解剖学員外教授となり、1821年から1871年まで解剖学の教授をつとめた。解剖学については、ウェーバーは、魚類の聴覚に特徴的な骨片を発見し、ウェーバー器官と命名した。

ウェーバーは後に感覚生理学の研究に集中し、触覚や聴覚の研究をした。ここで発見したのがウェーバーの法則である。彼は、1840年からは生理学教授を兼任したが、1865年にはカール・ルードヴィヒに生理学教授を譲った。

ウェーバーの法則

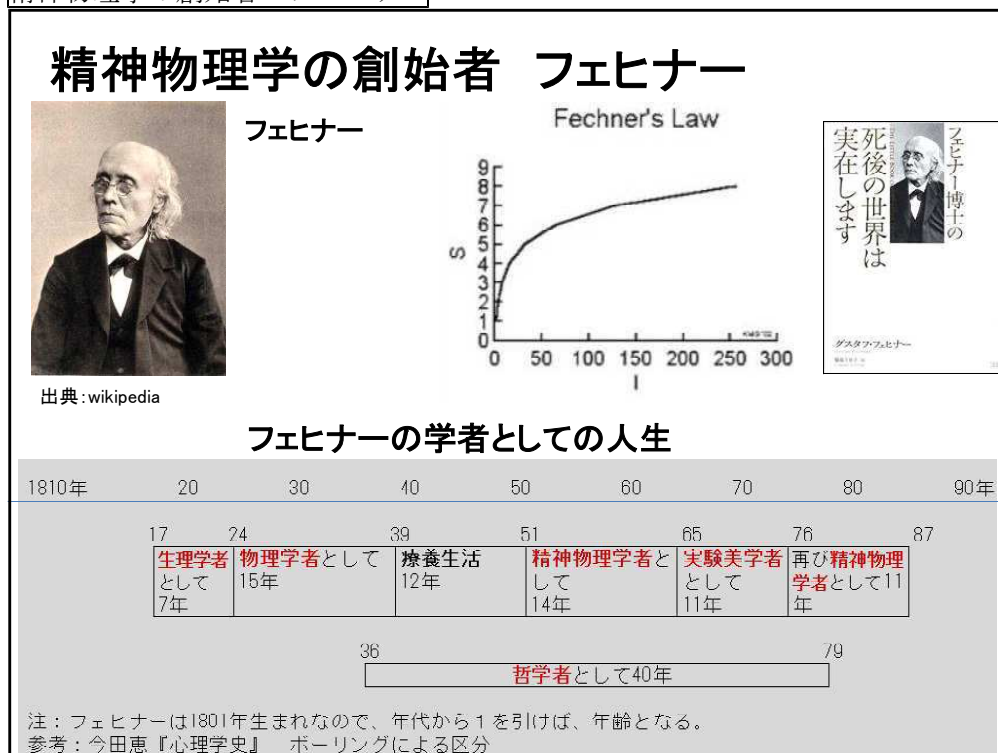
ウェーバーが発見したことは、「刺激量 S と弁別閾 ΔS の比は一定である」というものである。

$$\frac{\Delta S}{S} = \text{一定}$$

のちにフェヒナーが「ウェーバーの法則」と命名し、心理学において最初に数量化された法則といわれる。フェヒナーは、この法則を含みつつ、より包括的に説明するウェーバー・フェヒナーの法則を打ち立てた。この業績により、ウェーバーは精神物理学の先駆者といわれる。

精神物理学の創始者 フェヒナー

精神物理学の創始者 フェヒナー



ライプツィヒ大学の物理学の教授で、前述のように、ヴントと並んで、実験心理学の創始者の一人とされるのがフェヒナーである。彼の人生は波乱に満ちている。

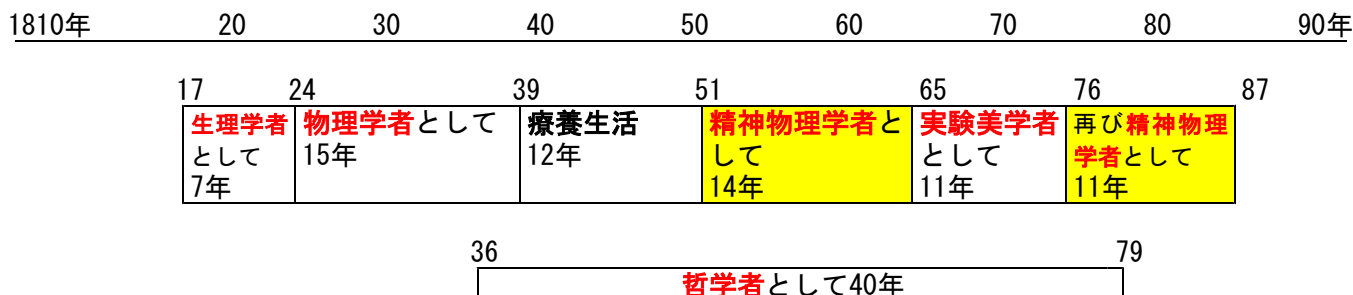
グスタフ・フェヒナー（1801～1887年）は、ドレスデンとライプツィヒで医学の教育を受けた。1834年にライプツィヒ大学の物理学教授となり、1835年に博士号をとった。ところが、残像を研究するために太陽を肉眼で見つめすぎて失明のようになり、3年間は暗闇の中ですごし、うつ状態にもなり、人を避けて暮らした。1839年、38歳で教授職を辞した。その後徐々に回復して、研究を続けたものの、大学には戻らずに、講演や著作活動で自説を主張し、ライプツィヒで86歳の人生を終えた。

フェヒナーは、ひとつの学問領域にとらわれず、興味のおもむくままいろいろな領域の研究をした。ポーリングは、フェヒナーの研究テーマを次のように表現した（今田恵『心理学史』）。

幅広く変化に富んだフェヒナーの一生は、生理学者として7年（1817-24）、物理学者として15年（1824-39）、療養生活12年（1839-51）、精神物理学者として14年（1851-1865）、実験美学者として11年（1865-76）、再び精神物理学者として11年（1876-87）、そしてそれらを通じ哲学者として40年（1836-79）の一生であった。

た。
これを図示すると、次の図のようになる。

◆フェヒナーの学者としての人生



注：フェヒナーは1801年生まれなので、年代から1を引けば、年齢となる。
参考：今田恵『心理学史』 ボーリングによる区分

このように、フェヒナーはいろいろな学問領域をかじったように見えるのだが、実はそうではない。結局は、世界と自分の関係を科学的に分析したいというひとつの問題意識を突きつめただけである。その点では一貫している。そうした問題意識が、当時の学問領域からみると、たまたま物理学・生理学・心理学・美学・哲学というバラバラな領域に対応したというだけの話である。学者の研究領域というものは、一見、さまざまな領域に散らばっているように見えても、それは外面上のことにすぎず、学者本人にとってはひとつの一貫したつながりがあるものである。

フェヒナーに見る学者の人生

フェヒナーの人生は、学者の人生の典型である。私がこの「ドイツ アカデミック街道を歩く」で述べたいのは、学者の人生を考えるということである。学者の典型的人生というものは、一方では、毎日本を読み実生活から隔絶した隠遁者型の人生が想像できるが、一方では、研究の鬼となって自分や他者を傷つけるという自己中心的で破滅型の人生も想像できる。

フェヒナーの生活はその両方を持っている。実験のために自分の身体を傷つけたフェヒナーは研究の鬼である。しかも、そのために物理学科教授を続けられず、研究の手段を失ったという破滅的な結果である。研究のために、自分を痛めたが、他人を傷つけることがなかったのは救いである。しかし、この失敗の結果として、回復後は本を読み実生活から隔絶した人生を送った。両極を振り切った学者人生はきわめて興味深い。そこが私がフェヒナーに惹かれる点である。若い研究者に対して、人生モデルとして勧められるようなものでは決してない。しかし、それでも、フェヒナーのような徹底した学者人生を送ることに秘かな憧れは感じるだろう。

フェヒナーの3つの業績

フェヒナーの研究業績の意義は、今の心理学からみると、3つにわけることができる。①ウェーバー・フェヒナーの法則、②精神物理学的測定法、③精神物理学の創始。

①ウェーバー・フェヒナーの法則

フェヒナーは、人間の感覚について、ウェーバーの法則を拡張して、ウェーバー・フェヒナーの法則としてまとめた。ウェーバーの法則は「刺激量 S と弁別閾 ΔS の比は一定である」というものである。

$$\frac{\Delta S}{S} = \text{一定}$$

これは単なる刺激間の関係だけ述べたものである。フェヒナーは、これを拡張して、「感覚の大きさ」へと一般化した。

$$\gamma = k \log \frac{\beta}{b}$$

つまり、感覚の大きさ（ γ ）は、刺激の絶対値（ β ）に比例するのではなく、刺激の大きさの対数に比例する。 k と b は定数。

これを図示すると、中上のグラフのように、対数曲線となる。この曲線上で、ウェーバーの法則を簡単に説明することができる。その意味でウェーバーの法則を含んでいる。この公式は、ウェーバーの公式を含みつつ、それを一般化したものである。ちょうどニュートンの万有引力の理論を、アインシュタインが一般化して相対性理論をたてたように。

②精神物理学の測定法

彼はさらに、物理的世界と心理的世界を対応づける3つの測定法を考案した。精神物理学の測定法と呼ばれる。

- a) 最小弁別法
- b) 当否法
- c) 平均誤差法

これらは、現代の知覚心理学実験法の用語では、a) 極限法、b) 恒常法、c) 調整法にあたる。後にこれらを体系化したのは、ギルフォードやサーストンといった数理心理学者である。

私も何十年前の卒業論文でこれらの3つの方法を用いて、測定法と格闘したものである。今でも、心理学を専攻するとすぐに、調整法、極限法、恒常法などの「心理学的測定法」を勉強するが、これらはもとをたどればフェヒナーの本から出ている。

③精神物理学の創始

フェヒナーは、さらに、物理的世界と心理的世界を対応づける研究を考え、「精神物理学」と名づけた。そして、これを体系化して、1860年に『精神物理学要論』という本を書いた。

フェヒナーからヴントへ

フェヒナーの3つの業績、①ウェーバー・フェヒナーの法則、②精神物理学の測定法、③精神物理学の創始は、ヴントに大きな影響を与えた。ヴントはこの方法論にもとづいて、心理学実験室を作り、今日の実験心理学を体系化した。

だから、実験心理学の誕生の年は、1879年（ヴントの実験室開始）というよりは、フェヒナーの『精神物理学要論』が出版された1860年とすべきだとする人もいる。例えば、今田恵は『心理学史』の中で、1860年が実験心理学が始まった年としている。

今田は、一方のヴントに対しては、「心理学の歴史はヴントを境としてそれ以前と以後とにわけられる」と高く評価しつつも、「彼自身の心理学に対する貢献は、独創的なものでも、永久的なものでもない」と厳しい評価をしている。

◆ウェーバーが構想し、ヴントが実装した実験心理学

	理論面	実験面（測定法）
ウェーバー	ウェーバーの法則 ↓	弁別閾の測定 ↓
フェヒナー	ウェーバー・フェヒナーの法則 精神物理学の創始	精神物理学の測定法
ヴント	精神物理学を心理学の基礎と位置づけて組織化	心理学実験室の設置

この表に示すように、フェヒナーは、ウェーバーを受け継いで、理論面ではウェーバー・フェヒナーの法則、精神物理学の創始、実験面では、精神物理学の測定法を確立した。実験心理学の基本的な枠組みは、フェヒナーが作ったものである。しかし、精神物理学は、生理学から出てきた理論であり、それが心理学の基礎となるとはフェヒナーは考えていなかった。

これに対して、ヴントの業績は、理論的には、精神物理学を心理学の基礎と位置づけて組織化したということとどまり、オリジナルな理論を作ったわけではない。ヴントの業績は、むしろ実験面にあり、心理学実験室を設置したということがそれである。つまり、フェヒナーが考えた理論や方法を、ヴントが実装したということであり、そこにヴントの意義がある。

ウェーバーとフェヒナーとヴントの3人は、ライプツィヒ大学という場所で、ほぼ同時期に研究をすすめ、互いに影響し合った。つまり、名目的ではなく、実質的な意味に置いて、実験心理学はライプツィヒという場所で生まれたといってよいのである。

ライプツィヒ詣で 心理学の道をたどればライプツィヒに行き着く

ライプツィヒ大学が心理学発祥の地とされるのは、ヴントの実験室に世界中から留学生が集まり、ライプツィヒが新しい心理学研究の中心となったからである。ライプツィヒで学んだ心理学者は、祖国に帰って、実験心理学の研究室を開き、パイオニアとなった。今から 100 年以上も前に、このライプツィヒ大学が、世界中の若き心理学者のメッカとなり「ライプツィヒ詣で」がおこなわれたというのは、面白いことである。

国	心理学者（帰国後の所属大学）
ドイツ	ミュンスターバーグ（フライブルク大学）、ランゲ（チュービンゲン大学）、キュルペ（ミュンヘン大学）、モイマン（ハンブルグ大学）、マルベ（ヴュルツブルク大学）、ステーリング（ボン大学）
アメリカ	ホール（クларク大学）、キャッテル（コロンビア大学）、ティチナー（コーネル大学）、ストラットン（カリフォルニア大学）、ウィトマー（ペンシルバニア大学）
イギリス	スピアマン（ロンドン大学）、マリノフスキー（ロンドン大学）
ロシア	ベヒテレフ（カザン大学）
スイス	リップス（チューリッヒ大学）
中国	カイ・ユアンペイ（ペキン大学）
日本	松本亦太郎（東京大学・京都大学）、桑田芳蔵（東京大学）、野上俊夫（京都大学）など（後述）

ドイツ国内はもとより、アメリカ、イギリス、ロシア、スイスなどから集まっている。

また、日本や中国などアジアの留学生もいる。

ヴントの民族心理学についても後継者は多く、例えば、イギリスのマリノフスキーは、ヴントのもとで学位を取り、ロンドン大学で文化人類学の教授となり、多くの文化人類学者を育てたのは有名である。

基礎心理学者だけでなく、臨床心理学の祖と言われるウィトマー（ペンシルバニア大学）もヴントの実験心理学研究室で学んだのである。これも興味深いことである。このように、アメリカの心理学のルーツである点、ヴントの世界的影響力は強い。

ライプツィヒ詣でをした日本人

多くの日本人がヴントの心理学研究室を訪ねている。

後述のように、日本の松本亦太郎は、ヴントのもとで学び、帰国して、東京大学と京都大学に心理学実験室を作った。

また、井上哲治郎（のちの東京帝国大学哲学科教授）は 1885 年にヴントの講義を 1 学期聞いた（後述）。

桑田芳蔵（東京帝国大学）は、ヴントの民族心理学を詳しく伝えた。

さらに、野上俊夫（京都帝国大学）、野尻精一（東京高等師範学校）、金子馬治（早稲田大学）、川合貞一（慶應義塾大学）、塚原政次（広島高等師範学校）は、ヴントのもとで学び、帰国して、各大学で心理学を講義した。

彼らがヴントのもとに留学したのは、1885 ～ 1920 年のあたりである。当時は、多くの日本人の学者や学生が、ライプツィヒやハイデルベルクやミュンヘンに留学した。

三大詣で（ライプツィヒ詣で、ハイデルベルク詣で、ミュンヘン詣で、）

1905 ～ 1925 年に、ハイデルベルクで新カント派の哲学者（ヴィンデルバント、リッケルトら）のもとに、日本人留学生が集まった。有名な人だけ拾っても、波多野精一（のちの京都帝国大学教授）、朝永三十郎（のちの京都帝国大学教授、朝永振一郎の父）、桑木厳翼（のちの東京帝国大学教授）、九鬼周造（のちの京都大学教授）、三木清、羽仁五郎、大内兵衛、北吟吉、糸井靖之、石原謙、久留間鮎造、小尾範治、鈴木宗忠、阿部次郎、成瀬無極、天野貞祐、九鬼周造、藤田敬三、黒正厳、大峽秀栄、左右田喜一郎がいる。

これについては、私の「ハイデルベルクを歩いてみよう」を参照いただきたい。

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/>

一方、精神医学者のクレペリンは、ハイデルベルクやミュンヘン大学で精力的に研究を進めた。世界中の精神医学者は彼の名声を慕ってここを訪ねたので、ドイツ精神医学のメッカとなった。1912 年にはミュンヘンにドイツ精神医学研究所を作り、さらにミュンヘン詣では加速した。日本からも呉秀三（東京帝国大学医科大学教授）、斎藤茂吉、内村祐之（のちの東京大学医学部教授）など多くの精神医学者が留学した。

この時期に日本人留学生が増えたのは、明治末期から大正デモクラシーの時代が、日本の大学アカデミア形成期であり、西洋の学問をモデルにしようとする機運が高まったからである。

さらに、1914 年から 1923 年のドイツのハイパーインフレも大きな要因である。第一次大戦後に、ドイツの貨幣価値が下がったため、ドイツ人は貧しい生活を強いられ、地獄の時代を迎えた。その一方で、外国人にとっては天国の時代であった。日本の貨幣価値が上がったため、日本人はドイツで裕福に暮らすことができた。多くのドイツの大学教師は、日本からの留学生に対して、個人教授をしてお金をかせいだ。そうした留学バブルの典型は九鬼周造（のちの京都大学教授）であり、彼は、リッケルトの私宅でカントについての個人講義を受けた。また、後述のように、ヴントの遺族が蔵書を手放さなければならなくなり、それを日本人が手に入れたという現象もその典型である。

ヴント以降とライプツィヒ学派

ヴントの考えは、ドイツの心理学を活性化し、ヴントの影響を受けない心理学も多くあらわれた。ブレンターノの作用心理学、フッサールの現象学、シュトゥンプ、G・E・ミュラー、キュルペらのヴェルツブルグ学派の思考研究、エビングハウスの記憶研究などである。そして、1912年には、ゲシュタルト心理学があらわれた。主要な4人（ヴェルトハイマー、コフカ、ケーラー、レヴィン）がベルリン大学で研究したので、「ベルリン学派」と呼ばれた。

ライプツィヒ大学心理学科で、1917年にヴントの後を継いだのはクリューガー（1874～1948年）であった。クリューガーらは、「全体性心理学」を提唱し、こちらは「ライプツィヒ学派」と称されるようになった。1930年代にナチスが台頭すると、ベルリン学派のゲシュタルト心理学者はすべてアメリカに亡命を余儀なくされた。この後、ライプツィヒ学派が力を持ち、ザンダー（ボン大学）、ルーデルト（ハイデルベルグ大学）、ウェレック（マインツ大学）、ワルテッグなどが活躍した。ワルテッグは、ライプツィヒ学派の全体性心理学をもとにして、投映法のワルテッグ描画法を開発したことで知られている。

精神医学のクレペリンへの影響

ヴントは、精神医学のクレペリンに大きな影響力を与えたことでも有名である。後で精神医学のところで述べるように、現代の精神医学の体系を作ったクレペリンは、ライプツィヒ大学の大学病院に勤務するかたわら、ヴントの実験心理学研究室で研究した。クレペリンは、ここで連想についての実験や作業曲線の実験をおこなった。こうしたクレペリンの実験にヒントを得て、日本の内田勇三郎が開発したのが「内田クレペリン・テスト」である。このようにヴントの心理学は精神医学にも影響を与えた。

現在の心理学科

現在の心理学科は、ライプツィヒ大学の「生物・薬理・心理学部」という学部には属している。

第1部門（基礎心理学）と第2部門（応用心理学）に分かれている。

第1部門は、実験心理学と方法、認知心理学、認知生物学的心理学、心理学方法論、社会心理学、発達心理学の部門からなる。

第2部門は、産業組織心理学、人格心理・心理アセスメント、臨床心理学・心理療法、臨床児童思春期心理学の部門からなっている。

なお、1980年には、心理学科創設100周年を記念して、ライプツィヒで、国際心理学会議（第22回大会）が開かれた。会場は、カール・マルクス大学（現在のライプツィヒ大学）であった。東ドイツで最初の国際学会とのことで、国を挙げての支援があり、開会式はオペラ座で開かれ、ゲバントハウス・オーケストラが演奏したという。世界から4000人が集まり、日本からも77名が参加した。その参加者に聞いたところでは、融通のきかない体制に参加者は苦勞したようである。このことは『日本心理学会75年史』にも書かれている。

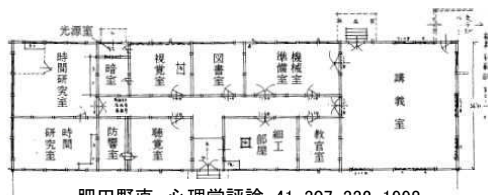
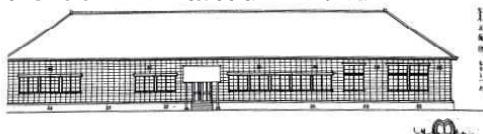
松本亦太郎と東京大学心理学実験室

松本亦太郎



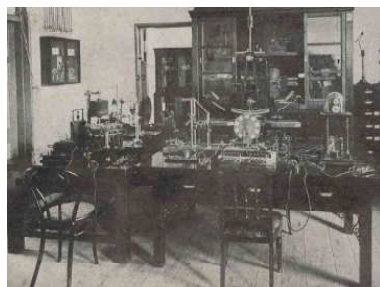
出典: wikipedia

東京帝国大学 精神物理学実験室



肥田野直、心理学評論, 41, 307-332, 1998

心理学実験機器



松本亦太郎 実験心理学十講

松本亦太郎（1865 ～ 1943 年）は、ライプツィヒなど世界の心理学実験室を見て帰国した。東京帝国大学の講師であった松本は、1903 年に日本で最初の心理学実験場を東京帝国大学に設置した（左下の写真）。その設置は、教授元吉勇次郎の依頼によるものである。松本の『実験心理学十講』（弘道館、1928）には、当時の哲学科の中で、実験室を設立した苦労話が書かれている。最初の実験室は、126 坪の木造の平屋で、もとの医科大學病理教室を移築したとある。位置は、現在の安田講堂の場所である（肥田野、心理学評論, 41, 307-332, 1998）。部屋数は10室で、電気は工科大学の発電所より供給し、これは東洋で唯一だろうとしている。

その後、松本は、1905 年まで東京高等師範学校（筑波大学の前身）の教授をつとめ、ここに心理学実験室を開いた。1906 年には、京都帝国大学の初代心理学教授となり、1908 年に心理学実験室を開いた。高額な実験機器や図書は、東京高等師範学校からゆずりうけたという。今ではとても考えられないことである。それを許した師範学校の嘉納治五郎校長は太っ腹であった。

京都帝国大学の実験室は、木造平屋 108 坪で、600 点の機械があったという。ほとんど欧米から輸入したものとのことで、『実験心理学十講』にそうした写真が載っているが、なかなか美しい機械類である（右側の写真）。これらは真鍮製の大型機器であり、当時の心理学は「真鍮製機器の時代」と揶揄されることがある。たしかに、当時の哲学者にとって、このような機械を得意気に操作する松本は、マッドサイエンティストに見えたに違いない。

なお、松本は、1912 年に、元吉勇次郎の死去の後を継いで東京帝国大学教授となり、日本心理学会を創設するなど活躍した。旧制高校に心理学教育が必要なことを文部省に認めさせたのも彼である。つまり、私が勤務する駒場キャンパスの心理学教室の大元を作ったのは松本ということになる。

自分の職業のルーツには関心があるものである。私は心理学者であり、心理学のルーツであるヴントや、哲学から分かれて科学としての心理学ができた経緯、日本の大学に心理学ができた歴史などに興味がある。ライプツィヒを調べると、このような問いへの答えが見つかる。

東北大学のヴント文庫

東北大学 ヴント文庫



東北大学川内キャンパス
図書館本館



出典: 東北大学ホームページ

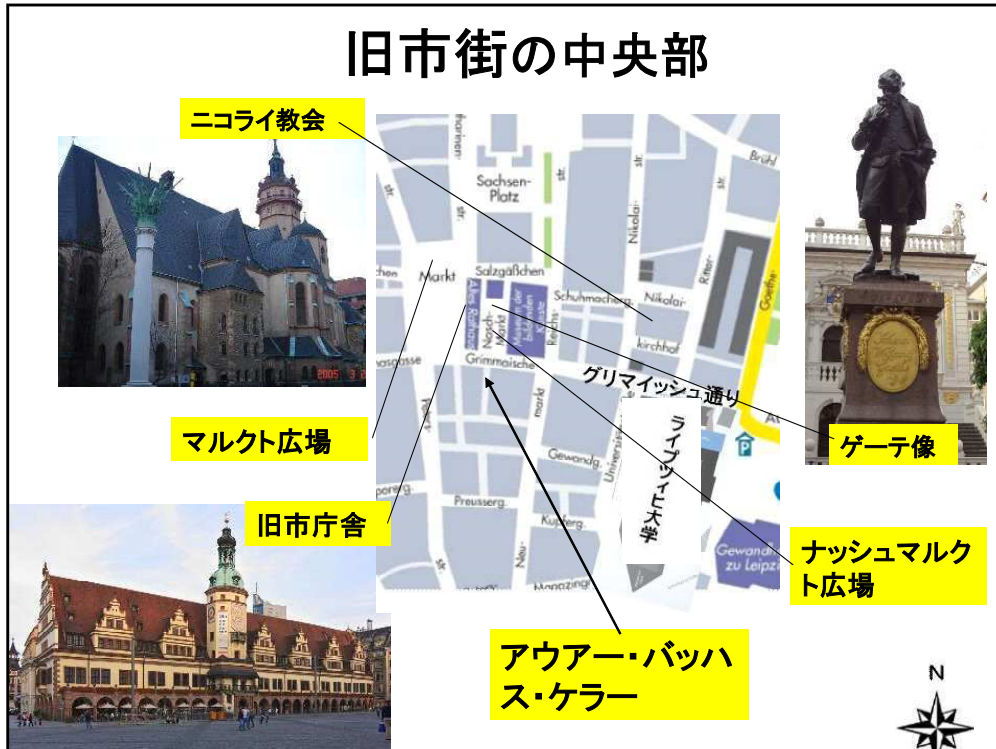
ところで、日本の東北大学の図書館には、ヴントの蔵書が 7000 冊も残っており、「ヴント文庫」と呼ばれる。ヴントの蔵書の 6 割に当たるというからすごい。

のちに東北大学心理学の初代教授となる千葉胤成が、ドイツ留学中の 1922 年に、ヴントの遺族が蔵書进行り出すという情報をつかんだ。前述のように、当時のドイツは第一次世界大戦のインフレーションで、マルクの価値が一兆分の一に下ったという。こうして多くの日本人はドイツの大学に留学した。

千葉はヴントの蔵書を 2 万円で購入した（今の金額で 1000 万円以上という）。この蔵書をめぐっては、ライプツィヒ大学やアメリカのエール大学、ハーバード大学も購入に乗り出していたが、千葉はそれに競り勝った。

ヴント文庫は、現在でも東北大学川内キャンパスの図書館本館で閲覧できる。

旧市街の中央部



ブルグ通りには、ライプツィヒ大学エジプト博物館があり、600 点が展示されている。

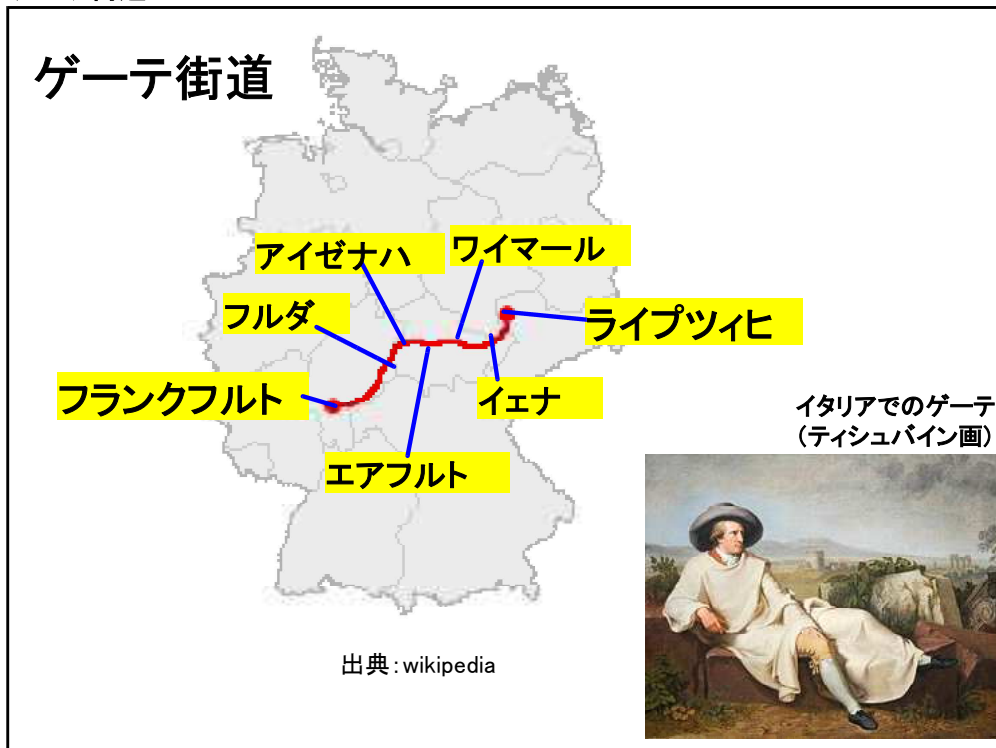
また、ライプツィヒ大学の日本研究学科もある。

ゲーテ像

旧市庁舎の裏側のナッシュマルクトという広場に、ゲーテ像が立っている。若々しくて細っそりした大学生のゲーテの姿である。

ゲーテ (1749 ~ 1832 年) は、ライプツィヒと結びつきが深い。

ゲーテ街道



出典: wikipedia

ライプツィヒは「ゲーテ街道」の終点である。ドイツ観光局は、1954 年にゲーテゆかりの地を結んだルートを「ゲーテ街道」と名づけている。ゲーテが生まれたフランクフルトを出発点とし、大臣として 50 年をすごしたワイマールを経由し、大学生活を送ったライプツィヒが最終点である。

ゲーテのライプツィヒ



ゲーテは、16 歳からライプツィヒ大学の法学部で学んだ（右上の写真）。しかし、これは親の希望がつよく働いたからであり、ゲーテ自身は文学の道に進みたかった。ライプツィヒ大学では、真面目な学生ではなかったようだ。とはいえ、これは当時のふつうの大学生と同じである。

彼の下宿はフォイアーケーゲル “Grosen Feuerkugel” という名前の高級マンション（左下の写真）で、ここには詩人のレッシングやクライストも住んだことがあるという。父親が金持ちで、ふつうの学生の2倍の仕送りを受けていたり、こういうところに住めた。この建物は空襲で焼けたので、今はない。

このマンションは、住所は Neumarkt 3 である。心理学科のある通りである。この建物は大学通り Universitätsstraße にも面していたので、大学のすぐそばにある。地図に示すように、大学通りは、現在のゲーテ通りより1本西側である。ゲーテ通りがゲーテと関係があったのかについては不明。

法律より絵の勉強

ゲーテは、父親から強制された法学には興味ももてず、大学では詩の講義に出たり、また、絵の勉強に打ち込んだりした。彼は、ライプツィヒ美術院（後述）の院長をしていたアダム・エーザー Adam Oeser (1717 ~ 1799) のもとに通って絵の勉強をした。ゲーテはのちにエーザーへの手紙で、「私があなたから学んだことは、3年間大学で学んだすべてのものよりも多い」という謝辞を書いている。

エーザーは、美術史家として著名なヴィンケルマン (1717 ~ 1768 年) の親友であり、1754 年にはエーザーの家に寄宿していたこともある。ゲーテもヴィンケルマンの著書に影響を受けた。のちにヴィンケルマンがイタリアのトリエステで殺されてしまう。この事件は世界中にショックを与えたが、崇拜者のゲーテは『詩と真実』の中でそのショックを表現している。

ヴィンケルマン殺害事件については、謎が多く、今でもミステリー小説が出たりしている。これについては丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩き方』（有斐閣）の「トリエステ殺人事件」も参照いただきたい。

ケートヒェンへの恋

ライプツィヒ時代のゲーテは、友人たちとあちこち飲み歩いていた。3歳年上のアンナ・カトリナ・シェーンコプフ（愛称ケートヒェン）という女性に恋をした。彼女は、ライプツィヒでワイン取引の経営者の娘であった。

ゲーテは詩をたくさん書いており、『アネッテ』という詩集を作ってささげた。2年間の熱烈な恋だったが、振られてしまった。彼女は、のちにライプツィヒ副市長となる法律家と結婚した。

その後、ゲーテは結核にかかってしまい、ライプツィヒ大学を3年でやめざるをえなかった。彼はフランクフルトの自宅に戻り、1年半ほど療養した。

ゲーテの躁鬱の7年周期

精神医学的な天才論の創始者であるメビウスは、1898 年に『ゲーテ』という本を書き、ゲーテの躁鬱の7年周期を見出した。これをクレッチマーが『天才の心理学』（岩波文庫）で紹介している。

ゲーテは7年に一度、躁の波がやってきた

	年齢	女性	躁のエピソード	場所
1	18 歳	ケートヒェン	ライプツィヒ大学の学生の時、ケートヒェンに熱烈な恋をして、ふられた	ライプツィヒ
2	24 歳	シャルロッテ	弁護士となったゲーテは、シャルロッテに恋をしたが、彼女にはすでに婚約者がいた。そこでゲーテは自殺まで考えた。この事件が小説『若きウェルテルの悩み』を生んだ	ヴェッツラー
3	31 歳	フォン・シュタイン夫人	フォン・シュタイン夫人に恋をしたが、いきづまり、うつ状態になった	ワイマール
4	37 歳	クリスティアーネ	ゲーテは枢密顧問官という重要な職にあったが、突然イタリアへ失踪した。イタリアで彼は4回目の躁を迎え、詩を作り、2年間陽気に暮した。このあと国へ戻り、花売り娘クリスティアーネと結婚した	イタリア
5	45 歳		それまで冷淡に交際を断わっていたシラーと突然親しく交際しはじめた	ワイマール
6	51 歳		創作意欲が高まり、大作『ファウスト』の重要な部分を書いた	ワイマール
7	58 歳	ミンナとジルヴィア	ゲーテは気分の波が高まり、ミンナとジルヴィアに恋をし、次々と詩を作った	カールスバード
8	65 歳	マリアンネ	マリアンネに恋をし詩を作った。『西東詩集』に結実	ハイデルベルクなど
9	72 歳	ウルリーケ	53 歳も年下のウルリーケに恋し、結婚まで考えるがことわられた	マリーエンバード
10	81 歳		自叙伝や『ファウスト』を完成し、82 歳で死亡した	ワイマール

このように、ゲーテ（1749～1832 年）の躁状態の周期は、だいたい7年であることがわかる。

ゲーテ自身も、人生をふりかえり、自分の躁うつ周期を観察している。

躁になると、創作意欲が高まって多くの詩や小説を作る。彼の作品の多くは躁の時に発表されている。そして同時に女性に恋をする。クレッチマーによると、恋をしたから詩を作ったのではなく、逆に、躁状態による詩的興奮と性的興奮が同時におこって、たまたまそばにいた女性に恋をしたのだという。

クレッチマーは、ゲーテを循環気質の典型としている。基本的には同調性（裏表のない開放的な性格）を持ち、対人関係は周囲の世界にとけこみ、愛想よく、自然で直截である。この同調性の上に、躁気分とうつ気分という相反する気分の比率を持つ。ゲーテは、躁気分とうつ気分が循環的に波動した。

この表で言うと、ゲーテの最初の躁状態がライプツィヒでのケートヒェンへの恋だったわけである。失恋によって、彼はうつ状態になってしまう。

ちなみに、第4回目については、私の『イタリア・アカデミックな歩き方』（有斐閣）で触れている。

また、第8回については、私の「ハイデルベルクを歩いてみよう」にまとめた。

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/>

アウアーバックス・ケラー

アウアーバッハス・ケラー



ファウストとメフィスト



魔法にかけられた学生



ゲーテ像のあるナッシュマルクト広場の南に、メードラー・パッサージュというアーケード街がある。入口を入っていくと、アウアーバッハス・ケラー Auerbachs Keller という地下レストランがある（左上の写真）。『地球の歩き方』にも紹介され、日本人も多く行く店である。

ここにはすでに 1438 年にはワインバーがあったという。1525 年に、市議員でライプツィヒ大学出身の医師ハインリヒ・ストローマーが、古いバーを改築して、新たにバーを開店した。ストローマーは王室の主治医もつとめた名士で、ドクトール・アウアーバッハスと呼ばれていた。彼がアウアーバッハス町の出身だったからである。そこで、このバーはアウアーバッハスのケラー（地下ワイン倉庫）と名づけられた。

ゲーテ『ファウスト』とアウアバッハス

1765 ～ 68 年に、若きゲーテがライプツィヒ大学にの学生だった頃、彼はこの地下バーがお気に入りだった。バーの壁には、魔術師・錬金術師ファウスト博士の伝説の絵画が 2 枚飾っており、ゲーテは、その絵や地下バーの雰囲気魅せられてしまった。2 枚の絵とは、1 枚はファウスト博士が学生たちと酒を飲んでいるシーンであり、もう一枚は悪魔の力によって博士がワイン樽のフタに乗って飛んでいくシーンであった。

のちに、彼が戯曲『ファウスト第 1 部』を書いた時に（1808 年発表）、このバーを舞台に選び、戯曲の中に実名で登場させる。ゲーテの『ファウスト』によって、この店はとても有名になった。森鷗外は、アウアーバッハス・ケラーを「アウエルバッハの窖（あなぐら）」と訳した。

第 1 部 2073 ～ 2336 行：すべての学問を知り尽くした老ファウスト博士は、悪魔メフィストフェレスによって、この「アウエルバッハの窖」の中に連れ込まれる。ここの喧噪にあきれて、ファウストは別の場所に行きたいとのぞみ、そこからメフィストのワナにはまってしまう。

ファウストの像

アウアーバッハス・ケラーに入る階段の前には、道の両側に、2 つのブロンズ像がたっている。これらは、1913 年に、Mathieu Molitor によって作られたもので、『ファウスト』のシーンを再現したものである。

第 1 は、老ファウスト博士を悪魔メフィストフェレスがそそのかしているところである（右の写真）。ファウストの足はピカピカに光っているが、これはファウストの足に触ると幸福になるというジンクスのために、観光客がみんな触るからである。

第 2 は魔法にかけられた学生の像である（左下の写真）。

森鷗外とアウアバッハス・ケラー

ライプツィヒに留学した森鷗外（1862～1922）も、このレストランを訪れている。ライプツィヒにいた井上哲次郎とアウアーバッハス・ケラーに立ち寄った。この訪問は、日本文学史上大きな事件だったのだが、これについては、後の鷗外のところ（第 2 章－1）で述べることにする。

旧市街の観光地

旧市街にはライプツィヒの観光スポットが集まっている。マルクト広場、バッハ博物館（バッハは晩年の 27 年間ライプツィヒに住んで、作曲活動が続け、この地で生涯を閉じた）、トーマス教会（バッハがいた教会）、

ファインアート美術館、旧市庁舎とライプツィヒ歴史博物館などである。

ニコライ教会は、東ドイツ平和革命のきっかけとなった場所である。1989 年に、この教会に人々が集まり、それがデモに発展した。東ドイツ政府はこれを武力で鎮圧しようとしたが、失敗し、開放運動は頂点に達し、それがベルリンの壁崩壊につながったという。

ちなみに、マックス・プランク進化人類学研究所のパンフレットには、ライプツィヒの博物館トップ 5 が載っていた。それらは、①バッハ博物館、②ファインアート美術館、③自然史博物館、④ライプツィヒ歴史博物館、⑤同時代史フォーラムである。

ライプツィヒ音楽軌道



旧市街散歩に役立つのが「音楽軌道」(ミュージック・トレイル)である。

音楽軌道は、2012 年に市が設定した散歩コースであり、世界遺産に登録申請をしているとのこと。ライプツィヒは音楽と深く関わる都市であり、音楽とかわる遺産を効率的に回れるのはうれしいことである。ドイツには珍しく、トニーというゆるキャラまで作られている。

音楽軌道のホームページは <http://notenspur.de/>

3つのコースからなっているが、完成しているのは①だけで、②と③は準備中のようなのである。

コース名	概略	全長・所要時間	チェックポイント	本稿の章
①ライプツィヒ音楽軌道 Leipziger Notenspur	旧市街内と市東部の音楽史跡	5.3 キロ。 徒歩で 2 時間	23 カ所 2012 年完成	1 章
②ライプツィヒ音色の弧線 Leipziger Notenbogen	旧市街から市西部の音楽史跡	5.0 キロ。 徒歩で 2 時間	15 カ所 準備中	3 章
③ライプツィヒ音色の銀輪 Leipziger Notenrad	郊外にある音楽史跡	40 キロ。 貸し自転車利用を推奨	20 カ所 準備中	4 章

ここでは、旧市街歩きに役立つ①ライプツィヒ音楽軌道 Leipziger Notenspur を紹介する。②については 3 で、③については 4 で触れる。

ライプツィヒ音楽軌道には、以下の 23 のチェックポイントがある。各チェックポイントには解説板が作られている。チェックポイント間は、地面に埋め込まれた波形のサインに従って歩けばよい。前述の「リング」の形と大きさをみると、だいたいの位置や距離がわかっているだろう。2～9 は、旧市街を出て、市東部に入る。

- 1 ゲヴァントハウス・コンサートホール
- 2 メンデルスゾーン旧宅
- 3 グリーク記念室
- 4 旧ペーターズ音楽図書館
- 5 グラッシィ楽器博物館
- 6 旧ヨハニス墓地

- 7 シューマン旧宅
- 8 印刷地区
- 9 ワーグナー胸像
- 10 オペラ座
- 11 旧ニコライ学校
- 12 ニコライ教会
- 13 旧市庁舎
- 14 ライプツィヒ造形美術館
- 15 カフェ・バウム
- 16 ホテル・デ・ザクセ跡
- 17 トーマス教会
- 18 バッハ博物館
- 19 クララ・ヴィーク生家跡
- 20 旧音楽院跡
- 21 織物倉庫《ゲヴァントハウス》跡
- 22 ライプツィヒ大学パウリヌム
- 23MDR キューブ

これらのうち、1 ゲヴァントハウスや、10 オペラ座、22 ライプツィヒ大学パウリヌムなどは、すでに上でも紹介したが、他にもライプツィヒ大学に関連した史跡は多い。

2 メンデルスゾーン旧宅の近くには、ライプツィヒ大学音楽学科がある。ライプツィヒ大学で学んだ音楽家には、シューマンやワーグナーがいる。メンデルスゾーン旧宅は、メンデルスゾーン（1809 ～ 1847 年）の晩年の部屋を記念館としたものである。晩年といっても、彼は 38 歳の若さで病死した。彼が作ったライプツィヒ音楽院は、現在、ライプツィヒ音楽演劇大学として続いている（後述）。

5 グラッシィ楽器博物館は、ライプツィヒ大学の附属博物館であり、そのコレクションはドイツ最大・ヨーロッパ第 2 の規模である。ここには、ほかにグラッシィ美術工芸博物館と、グラッシィ民族学博物館がある。

ちなみに、グラッシィ博物館の北にあるインゼル通り 22 番地には、マックス・プランク数学と科学研究所（Max Planck Institute for Mathematics in the Sciences）がある。マックスプランク研究所については後で詳しく述べる。

第2章 ライプツィヒ市 南東部

次に、ライプツィヒの南東部にある大学の建物をたずねよう。ここは以下の3地区に分けて回る。

<目次>

1章	旧市街（リング内）
2章	南東部 2-1. 医学部・大学病院地区（ベイリッシャー広場駅） 2-2. 自然科学系学部地区（ヨハンニスアレー駅） 2-3. 精神科、獣医学部地区（ドイツ図書館駅）
3章	南西部
4章	北部

これらの地区は、それぞれトラムの駅から歩いていける。これらの駅はトラム2番ないし16番の沿線である。

ライプツィヒ市 南東部



地図に示すように、第1は、医学部・大学病院地区である。その北に、マックスプランク認知科学研究所がある。

第2は、自然科学系学部（物理学・地球科学部、化学・鉱物学部など）である。

第3は、精神科と獣医学部であり、その間にマックスプランク進化人類学研究所がある。

なお、この図の外になるが、すぐ北側にマックス・プランク数学と科学研究所がある。

2-1. 医学部 大学病院地区

2-1. 医学部・大学病院地区



バイリッシャー
広場駅



まず、医学部・大学病院地区を歩いてみよう。

地図の西側に、バイリッシャー広場がある。トラムのバイリッシャー広場駅がある。鉄道のSバーンのバイリッシャー駅もある。ここから歩いてみよう、

地図に示すように、医学部大学病院は、南西に延びるリービヒ通りの両側に並んでいる。西側はニュルンベルガー通り、東側はヨハンニス・アレー、南側はフィリップ・ローゼンタール通りに囲まれた四角形の部分である。

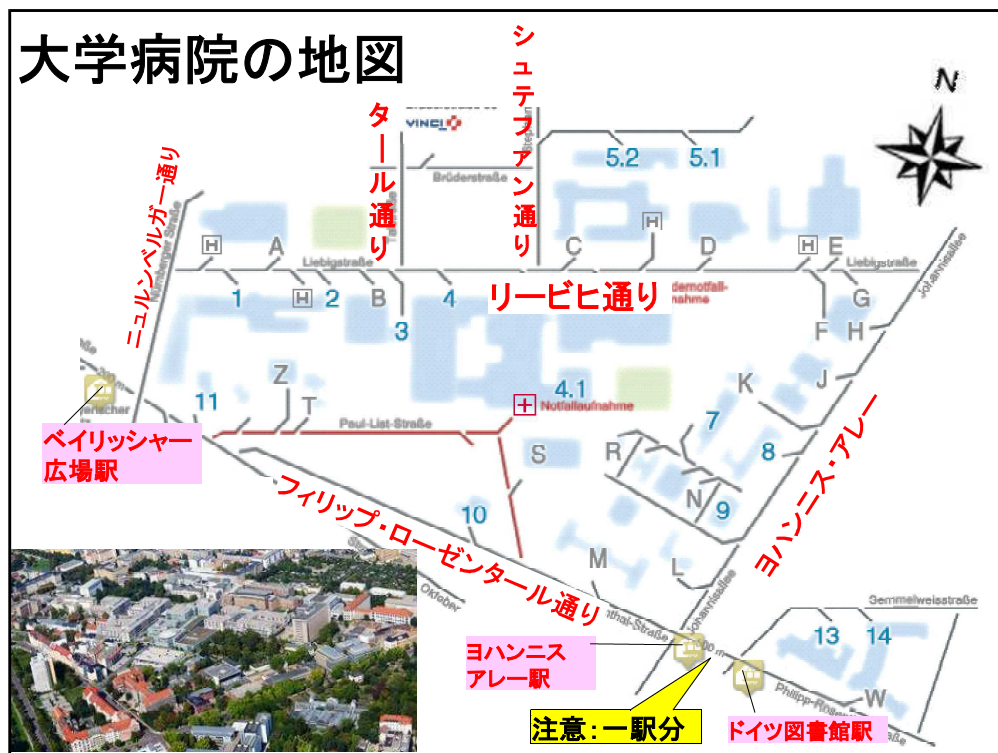
ライプツィヒ大学医学部の歴史

ライプツィヒ大学で最も有名な学部は医学部である。1415年に創立された。ウェーバー、フェヒナー、ルードヴィヒといった生理学者も医学部で活躍した。現在は、学生数約3000人の大所帯である。

ライプツィヒ大学医学部は、日本とも大いに関係がある。森鷗外もここで学んだ。また、後述のように、日本のお雇い外国人医師のベルツやショイベはライプツィヒ大学の出身である。さらに、京都府立医科大学はライプツィヒ大学医学部をモデルにして作られた。

大学病院の地図にだまされた

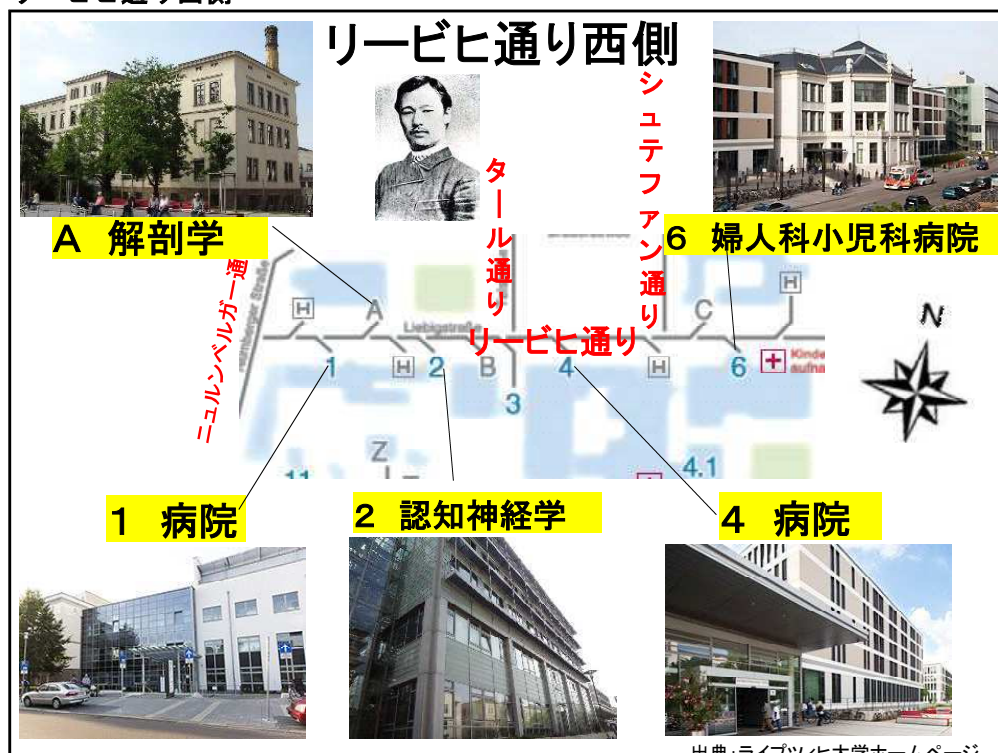
大学病院の地図



大学病院のホームページにある説明図である。
以下、この地図に沿って説明する。

余談だが、この地図にはだまされた。この地図の南側、フィリップ・ローゼンタール通りに、13・14 番の精神科がある（後述）。この図では、ヨハニスアレーからすぐ近くにあるように書いてあるが、よくみると、この間の道路を省略してある。実際には、トラムの駅ひとつ分の距離がある。よく見ると、トラムの2つの駅が並んでいるので、省略されているとわかる。しかし、私は現地でこの省略に気がつかず、歩いていたら、いつまでも精神科に辿り着かないので、非常に疲れた。誤解を招きやすい地図である。

リービヒ通り西側



リービヒ通りの東側を歩いてみよう。ニュルンベルガー通りからリービヒ通りに入る。
リービヒ通りの北側には、A解剖学の建物がある。（アルファベットは医学部、数字は大学病院の施設を示す）

また、南側には、1 病院、2 認知神経学、4 病院、6 婦人科小児科病院（救急の入口も）の建物がある。

リービヒ通りから、2本の通りが北に向かって延びている。西側のタール通りは、森鷗外が下宿していた建物があったところである（後述）。
また、東側のシュテファン通りには、マックスプランク認知脳科学研究所がある。

マックス・プランク認知脳科学研究所



シュテファン通りを北に行くと、通りの東側にマックス・プランク認知脳科学研究所がある。
この建物の形は変わっている。入口の部分は円形になっている（右下の写真）。しかし、この建物は、上から見ると、アルファベットのJの字の形をしている（左の写真）。Jの下部分が通りに面しているので、円形の建物に見える。建物の南側から見ると、円形ではなく、Jの字型をしていることがわかるのである（右上の写真）。
マックス・プランク研究所は、ドイツを代表する研究機関で、ドイツ内外の各地に 83 の研究所を持っている。その歴史的な由来については、後の進化人類学研究所のところで述べる。ライプツィヒには3つの研究所がある。

ライプツィヒにある3つのマックス・プランク研究所

研究所名	住所 ホームページ	本稿の章
①マックス・プランク認知脳科学研究所 Max Planck Institute for Human Cognitive and Brain Sciences	Stephanstrasse 1a www.cbs.mpg.de	2 - 1 章
②マックス・プランク進化人類学研究所 Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology	Deutscher Platz 6 www.eva.mpg.de	2 - 3 章
③マックス・プランク数学と科学研究所 Max Planck Institute for Mathematics in the Sciences	Inselstraße 22 www.mis.mpg.de	1 章

マックス・プランク認知脳科学研究所は、以前は、マックス・プランク認知神経科学研究所と呼ばれていた。2004 年に、ミュンヘンのマックス・プランク心理学研究所と合体して、マックス・プランク認知脳科学研究所となった。その本部はライプツィヒに置かれ、2006 年に、ミュンヘンの心理学研究所がライプツィヒに移転した。日本の研究者でここに留学した人も何人かいる。

リービヒ通り東側



さて、リービヒ通りに戻り、その東側を歩いてみよう。

シュテファン通りとリービヒ通りの角には、C微生物・感染医学研究所がある。また、その東にはEカール・ルートヴィヒ生理学研究所がある（後述）。

リービヒ通りの南側には、高層ビルのベッテンハウスがある。このビルは、1984年に完成した入院用の医学部病棟だった。その5階と6階を精神科が使っていたという。しかし、現在は、このビルは病院としては使っていないようだ。

また、その東には、病理学研究所がある。ここは、元の衛生学研究所であり、森鷗外が通っていたところである（後述）。その東はG病理学・法医学の建物である。突き当たりはヨハンニスアレーという通りである。

ルートヴィヒ生理学研究所

カール・ルートヴィヒ生理学研究所とウェーバー



カール・ルードヴィヒ



ウェーバー



出典:ライプツィヒ大学ホームページ

ライプツィヒ大学の生理学研究は、1470年に、ゲオルグ・シルテルが生理学教室を作って以来、500年の

歴史がある。

1840 年から 1865 年までは、エルンスト・ウェーバーが主任教授をつとめた。ウェーバーの法則が精神物理学の先駆となったことは、前に述べた（第 1 章 ヴントの先駆者の項）きっかけとなった。ウェーバーはもともと解剖学の教授で、1840 年からは生理学教授を兼任していた。1850 年頃に、ライプツィヒ大学医学部の改革があり、生理学を強化することになった。しかし、ウェーバーは解剖学との兼任のため、生理学プロパーで最先端の生理学教授を呼ぶことになった。1865 年には、ルードヴィヒを教授として招き、今の場所に新しい研究所が作られた。彼の名前を取ってカール・ルードヴィヒ生理学研究所と命名された。この研究所は、ドイツやヨーロッパの生理学研究所の最先端となり、モデルとなった。

生理学者カール・ルードヴィヒ

この研究所を作ったカール・ルードヴィヒ（1816 ～ 1895 年）は、エアランゲン大学で医学を学び、マールブルク大学で博士号をとった。チューリッヒやウィーンで教授をつとめた後、1865 年にライプツィヒ大学の生理学研究所の初代主任教授と呼ばれ、研究所の名前にカール・ルードヴィヒとつけられた。彼は亡くなるまでその地位にあった。新しい方法で生理学研究をおこない、彼の生理学の教科書は有名である。生理学研究所では多くの弟子を育てた。

ロシアの生理学者パヴロフは、1884 年から 1886 年までドイツに留学し、ライプツィヒ大学のルードヴィヒの研究所で学んだ。パヴロフがカール・ルードヴィヒの学問的思想から大きな影響を受けたことは有名である。

ヨハニス・アレーの西側（医学部）



リービヒ通りから、ヨハニスアレーに出ると、その西側には、医学部・大学病院の建物が並んでいる。地図に示すように、H法医学、J免疫学などの基礎研究所、8移植医学研究所、L図書館（衛生学研究など）。南へいくと、フィリップ・ローゼンタール通りがある。

森鷗外のライプツィヒ留学

森鷗外のドイツ留学

1884(明治 17)年 22 歳	6 月	陸軍衛生制度調査および軍陣衛生学研究のためドイツ留学を命じられる	
	8 月	横浜から出港	
	10 月	ベルリン着	
	10 月	ライプツィヒへ行き、ライプツィヒ大学のホフマン教授の指導を受ける	ライプツィヒ時代
1885(明治 18)年 23 歳	2 月	ドイツ語による「日本兵食論」「日本家屋論」を執筆した	

	10月 ドレスデンで軍隊衛生学の研究に従事	ドレスデン時代
1886(明治 19)年 24歳	3月 ミュンヘン大学に入り、ベッテンコーフェル教授のもとで研究する	ミュンヘン時代
1887(明治 20)年 25歳	4月 ベルリンに移る。北罪柴三郎とともにローベルト・コッホを訪ね、その衛生試験所に入る	ベルリン時代
1888(明治 21)年 26歳	3月 ベルリンのプロシア近衛歩兵第2連隊に入り、軍隊医務に従事(～6月)	
	7月 ドイツ発。ロンドンやパリなどを訪問しながら帰る 9月 横浜港に到着 陸軍軍医学舎(陸軍軍医学校) 教官に任命される	
	9月 ドイツ人女性が来日、弟らが会い、帰国させた (これを扱った『舞姫』を1890年に発表)	

森鷗外は、1884年(明治17年)に、22歳の若さでドイツ留学を命じられた。目的は陸軍衛生制度の調査と軍陣衛生学研究のためであった。

鷗外のドイツ留学は、①ライプツィヒ時代、②ドレスデン時代、③ミュンヘン時代、④ベルリン時代の4つの時期に分かれる。1884年にはライプツィヒ大学に行き、1885年にはドレスデンに行き、1886年にはミュンヘン大学に入る。1887年には、ベルリンに移り、のちにプロシアの軍の隊務に携わった。丸4年間の留学生活であった。

鷗外は、1888年の9月に帰国した。その後ドイツ人女性が鷗外の後を追って来日したが、弟らが帰国させた。この話は小説『舞姫』のモデルになった。

森鷗外のライプツィヒ



この地図は、ライプツィヒの鷗外が関係した場所である。

参考資料：金子幸代「ライプツィヒ時代の森鷗外」鷗外、34号、44-63頁、1984年

鷗外の下宿

鷗外の下宿は、タール通り1番地 Thalstrasse 1にあった。タール通りは今でもあるが、この下宿の建物は今はない。1884(明治17)年10月の『独逸日記』には次のように書かれている。

二十三日。午後、府の東北隅 タール街 Thalstrasse なるヲオル Frau Eduard Wohl という寡婦の家の一房を借る。日本の二階にあたる所なり。我が房には机あり、食卓あり、臥床をば壁に傍ひたる処に据えたり。被衾は羽毛を装満したるものにして、軟にして暖なり。また「ソファ」Sofa あり。倦むとき憩うに宜し。

つまり、鷗外の部屋は2階にあり、部屋には机と食卓とベッドとソファがあった。ソファは、疲れた時に

休むにはとてもよいので、鵠外は気に入ったようである。また、掛け布団は羽毛が入っていて、柔らかくて暖かく、これも鵠外は気に入ったようである。

ヨハネス教会

この下宿の近くにヨハネス教会があり、この教会の鐘を鵠外は毎朝聞くことになる。下宿の近くには、前述のグラッシィ博物館がある。

衛生学研究所

リービヒ通り 24 番地が、衛生学研究所である。毎日、鵠外は下宿から衛生学研究所に通った。歩いたルートは、タール通りではなく、シュテンファン通りを南下したということである。

教授のホフマンの自宅は、現在のフィリップ・ローゼンタールにあった。また、指導してくれた同僚のシヨイベの自宅は、その少し西のエミリエン通りにあった。

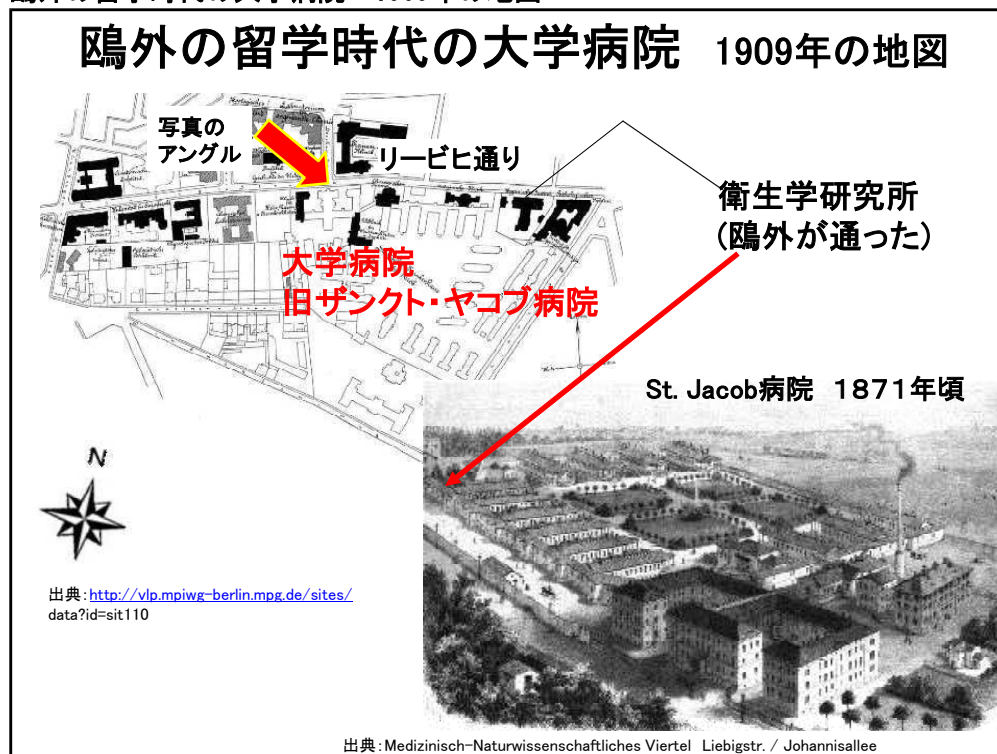
後述のように、鵠外と同僚の送別会がゴース地区の小宮殿で開かれ、鵠外は参加した（第4章参照）。

フォーゲル夫人邸

リービヒ通りの西側には、フォーゲル夫人邸がある。ここは、鵠外が毎日食事に通った場所である。タール通りの下宿は食事がつかなかったので、朝と夜に食事を出してくれるフォーゲル夫人を見つけて、毎日通った。このあたりの地区は、空襲で焼けてしまい、今とは通りの様子が全く変わってしまっている（後述）。

鵠外は、フォーゲル夫人の家でその親戚の女性たちと知り合い、水晶宮や劇場、コンサートなど、市内のあちこちの娯楽施設を回った。

鵠外の留学時代の大学病院 1909年の地図



鵠外が学んだ衛生学研究所は、リービヒ通り 24 番地 Liebigstraße 24 にあった。

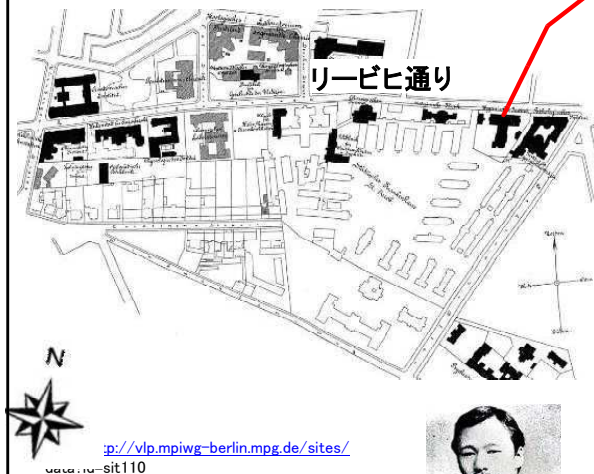
この地図は、1909 年のものだが、リービヒ通りの南側には、ザンクト・ヤコブ病院 St. Jakob 病院が建っていた。この病院は、1785 年にライプツィヒ市の西部（現在の動物園のあたり）に作られ、臨床教育がおこなわれた。1866 年に、現在のリービヒ通りに移転した。そして、この病院がライプツィヒ大学病院として臨床教育をおこなった。右下の写真のように大きな病院である。鵠外が留学した 1884 年当時にも建っていた。ザンクト・ヤコブ病院は、1925～1928 年に、Johannisallee 32 へと移転したため、病院の跡地は、大学の医学部のものになった。第二次大戦で建物は破壊された。

この地図には、鵠外が学んだリービヒ通り 24 番地の衛生学研究所がでている。右下の写真の左上には、衛生学研究所（当時は病理学研究所）の建物が小さく映っている。

衛生学研究所（鵠外が通った）

衛生学研究所（鷗外が通った）

1909年の地図



衛生学研究所
リービヒ通り24番地

現在の建物



鷗外が学んだ衛生学研究所は、リービヒ通り 24 番地 Liebigstraße 24 にあった。

この建物は、1871 年に病理学研究所の新しいビルとして建てられた。

この中に病理化学研究室があり、その主任はホフマンであった。1878 年に、衛生学講座が開設され、ホフマンが教授に任命された。おそらくこの病理学研究所の中の一部に衛生学講座が間借りしていたのだろう。鷗外が留学したのは、1884 年である。

1906 年には、病理学研究所は、東隣のリービヒ通り 26 番地 Liebigstraße 26 に新しい建物を作って移動したので、リービヒ通り 24 番地の建物が衛生学研究所として新たに出発した。

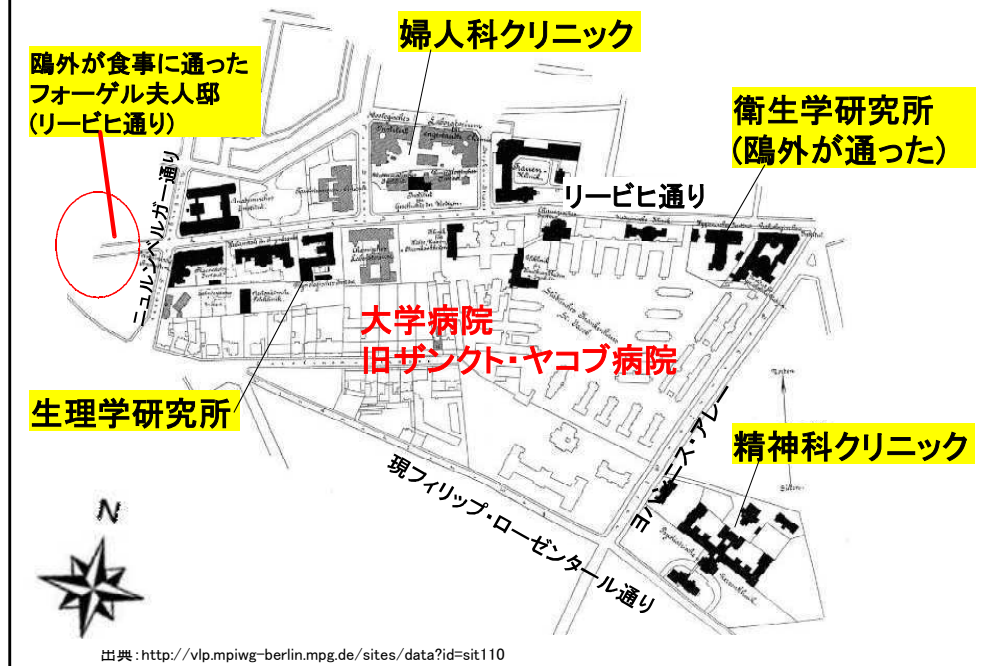
1945 年に、この建物は爆撃で大きな被害を受けた。

1953 年に再建されて、医学微生物学・疫学研究所として使われた。

今もこの建物は現存している。右上の写真のように古い建物である。私が 2012 年に行った時は、表札には「リービヒ通り 24 番地 病理学研究所（神経病理学部）」と書かれてあった（右下の写真）

鷗外の留学時代の大学病院 1909年の地図

鷗外の留学時代の大学病院 1909年の地図



1909年の大学病院の地図を見ていると、いろいろなことがわかって興味深い。

まず、鷗外が食事に通ったフォーゲル夫人邸である。鷗外が毎日の食事のまかないを受けるために通ったフォーゲル夫人邸は、リービヒ通りにあった。現在のリービヒ通りは、ニュルンベルガー通りで行き止まりになっているが、当時のリービヒ通りは、ニュルンベルガー通りを突き抜けて、西側に達していた。たしかに、1909年にはこのようになっていた。1945年の空襲で、この一帯は焼けてしまい、通りの様子が一変してしまったことがわかる。

また、リービヒ通りの西側に生理学研究所があった。それが後にこの通りの北東の場所へと移動した。

婦人科クリニックは、当時はリービヒ通りの北側にあったが、現在では、前述のように南側にある。

また、敷地の東南の場所に、精神科クリニックがある。ヨハニス・アレーと現フィリップ・ローゼンタール通りの角に立っていた。現在の化学・鉱物学部と物理学・地球科学部の敷地である。これについては精神科のところで述べる（第2－3章）。

森鷗外のライプツィヒの関係者（ベルツ、ホフマン、ショイベ）

森鷗外のライプツィヒ時代の関係者

ベルツ



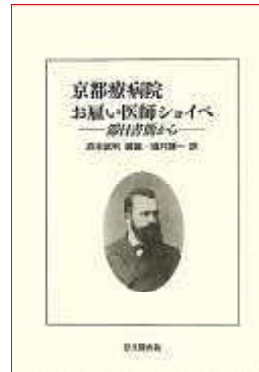
出典: wikipedia

ホフマン

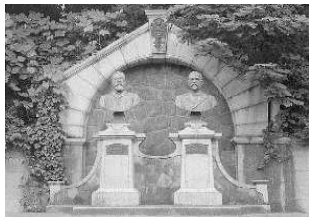


出典: ライプツィヒ大学

ショイベ



東京大学のベルツ像



鷗外をライプツィヒ大学のホフマンに紹介したのは、お雇い外国人として来日していたベルツである。エルヴィン・フォン・ベルツ（1849～1913年）は、ライプツィヒ大学医学部内科教授のヴンダーリヒのもとで下で内科を学んだ。1875年に、ライプツィヒ大学病院に入院していた日本人留学生・相良元貞をたまたま治療することになり、日本に関心をいだくようになった。

ベルツの来日のきっかけになった相良元貞の悲劇

相良元貞（1841～1875年）は佐賀藩出身の医師で、東京医学校（のちの東京大学医学部）につとめ、ライプツィヒ大学医学部に留学していた。しかし、臨床実習中に解剖メスで自分の手指を傷つけ、そこから細菌が感染し肺病を患ってしまう。その主治医となったのが26歳の若きベルツである。相良元貞の病気は治らず、帰国して1875年には、35歳の若さで亡くなった。東京医学校でお雇い医師を捜していることを知った相良元貞は、帰る直前に、ベルツを推薦し、その推薦が実現して、1876年にベルツは来日したのである。来日した時は、すでに相良は亡くなっていた。

日本近代医学の父ベルツ

ベルツは、1876～1902年まで26年間東京医学校の教師をつとめ、医師の教育にあたった。東京大学の本郷キャンパスには、ベルツの像が建っている（右下の写真）。医学校退官後は、皇室の侍医を務めた。草津温泉を再評価したことで知られている。

ベルツは日本人と結婚し、1905年にドイツに夫婦で帰国した。長男の徳之助は11歳で両親とともに渡独した。彼は、父親の遺した『ベルツ日記』（真中下の写真）をのちに出版し、当時はドイツでもっとも有名な日系ドイツ人となったという。

ベルツの紹介でホフマンのもとへ

日本陸軍は、ドイツの衛生学を調査するにはどこがよいかについて、日本にいたベルツに相談をした。ベルツは、母校のライプツィヒ大学の衛生学研究所を勧めた。軍は、この研究所へ留学させる人材を捜し、ドイツ語に堪能で優秀な22歳の森鷗外を選んだ。ライプツィヒ大学はベルツの母校であるし、また同じヴンダーリヒ門下で来日経験もあるショイベとベルツは知り合いだったので、勧めやすかっただろう。こうして衛生学研究所のホフマン教授のもとで鷗外は仕事することになった。

ベルツは、1884年には一時ライプツィヒに帰っていたので、鷗外が留学した直後に、ライプツィヒ大学にやってきた（というよりは、ベルツの帰国に合わせて鷗外の留学時期が決まったというほうが正確だろう）。そして、ベルツはホフマンやショイベを訪ねて、鷗外を交えて会食した。この4人は、ライプツィヒ大学医学部における日本人脈と言ってよいだろう。その後、もう一度、ベルツは大学を訪れて4人と会食している。それだけベルツは鷗外のことを気にかけていたことになる。

ホフマンのもとで研究

鷗外を引き受けたのは、衛生学研究所の教授ホフマンである（中上の写真）。フランツ・ホフマン（Franz Hofmann 1843～1920）は、ミュンヘン生まれで、ミュンヘン大学で医学を学んだ。1872年に、ライプツ

イヒ大学の病理化学実験室の主任教授となり、1878年に衛生学研究所の主任教授となった。当時は、衛生学の講座を持っていたのはミュンヘン大学とライプツィヒ大学だけであった。1884年から何回か医学部長をつとめた。鷗外が行った時も、ホフマンは医学部長の要職にあった。

鷗外が初めてホフマンに会いに行ったのは1884年10月23日のことで、『独逸日記』には、簡単に書かれている。「ホフマンの許に行く。この人瘦長にして態度沈重なり」

この文面だとホフマンへの第一印象はあまりよくなかったようである。しかし、ホフマンが鷗外を自宅に招待したのは、計12回にも及ぶ。それだけホフマンが鷗外を大事にしていたということである。

鷗外は、この研究所では、化学分析の基礎を身につけた。オリジナルな化学研究ができるだけの研究技術はまだなかったようだ。文献研究はさかんにおこない、ライプツィヒではドイツ語による「日本兵食論」「日本家屋論」を執筆した。

同僚のショイベに指導を受けた

ホフマンとともに、医師のショイベ（右の本の表紙の写真）も鷗外の世話をした。ハインリッヒ・ショイベ(1853～1923年)は、鷗外より9歳年上である。ショイベは、後述のように、1877～81年に日本に滞在し、京都府の療病院(のちの京都府立医大)でお雇い外国人として医学教育に携わっていた。日本でのショイベについては、『京都療病院お雇い医師ショイベ：滞日書簡から』(森本武利編、思文閣出版)が出ている。

(右の写真)。来日中に、日本の女性と結婚して1女をもうけたが離婚したという。日本人の栄養状態の調査も行った。ショイベは、1882(明治14)年に契約期間が切れて帰国した。

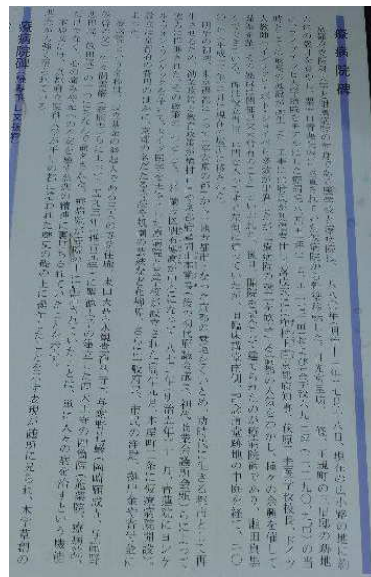
ショイベは、1881年に契約期間が切れて、ライプツィヒ大学に戻り、医学部の講師となり、ホフマンの指導も受けて研究していた。ショイベは、1885年には大学を去って、市・郡医として活躍した。

鷗外がライプツィヒに行った1884年は、ショイベがドイツに帰って3年後ということになる。鷗外は日本に通じているショイベを心強く思ったことだろう。ショイベは、内科教授のヴンダーリヒのもとで学んだので、ベルツと同門である。鷗外が『日本兵食論』を書くに当たって、ショイベに相談し、彼から多くの本を借りたりしている。

京都府立医科大学とライプツィヒ大学

京都府立医科大学とライプツィヒ大学

大学正門前の療病院碑



ショイベの日本での活躍は興味深い。

京都府立医科大学の正門には、療病院碑がたっているが、それによると、京都府立医科大学の前身となる医学校と病院は、ライプツィヒ大学をモデルにして作られたという。

明治時代初期には、首都が東京に移り、京都はさびれていったため、活性化のために、京都府知事の榎村正直や京都府顧問の山本覚馬は、西洋式の病院と医学校を独自に作ろうとした。1872(明治5年)、ライプツィヒ大学から推薦されたヨンケル医師(A. F. Junker von Langeegg)を雇い入れて、医学教育を始めた。わが国初の精神病院(仮癪狂院)を作ったのもヨンケルである。

ちなみに山本覚馬は、新島襄を支援して、同志社大学創設を果たした(「同志社」という名前をつけたのは覚馬といわれる)。覚馬は、後に新島襄の妻になる八重の兄である。NHKの大河ドラマ『八重の桜』では、覚馬を西島秀俊、八重を綾瀬はるか、襄をオダギリジョーが演じていた。覚馬は、初代府議会議長や初代商工会議所会頭をつとめた。京都の大学や教育を調べていると、あちこちで覚馬の名前を目に

する。京都東側の若王子山に「同志社墓地」があり、そこに覚馬は新島襄や八重とともに眠っている。

ヨンケルが帰国した後は、オランダ人医師マンスフェルト (G.C.van Mansvert)、その後はライプツィヒ大学出身の医師ショイベ (H. B.Scheube) を雇った。1877 年に、24 歳のショイベは来日した。ショイベを紹介したのはベルツである。ベルツは、ライプツィヒ大学のヴンダーリッヒ門下で、1876 年からお雇い外国人として東京医学校 (のちの東京大学医学部) の教師をしていた。

1880 (明治 13 年) には、医学校と療病院の建物が完成した。これが現在の府立医科大学と府立医科大学病院の前身である。療病院は、ライプツィヒ大学病院をモデルにして作られた当時としては最新式の施設であった。落成式にはショイベも参加した。この病院を作るためにショイベの指導があっただろう。

1881 (明治 14) 年に契約期間が切れて、ショイベが帰国した医学校と療病院は、日本人スタッフが医学教育と診療をおこなった。

助手兼軍医ヴェルツラー

衛生学研究所で鷗外の面倒をみたのは、助手のヴェルツラー Würzler だった。ヴェルツラーは、衛生学研究所助手とともに、ザクセン王国第八歩兵連隊一等軍医もつとめていた。鷗外は、ヴェルツラーに誘われ、ライプツィヒやドレスデンを見物したり、ドレスデンでの軍事演習に参加したりしている。鷗外の留学の目的は、研究というよりは、陸軍衛生制度の調査ということであるから、軍の仕事を知るには、軍医ヴェルツラーとの交際は大いに役に立った。

森鷗外とアウアーバハス・ケラー

森鷗外とアウアーバハス・ケラー

店内の絵



当時の鷗外



ファウスト



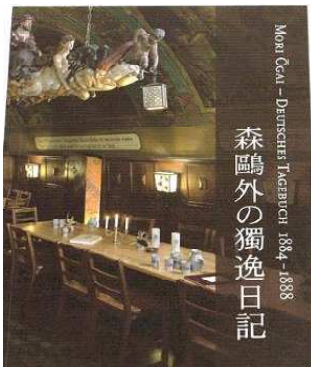
井上哲治郎



メフィストフェレス



晩年の鷗外



森鷗外の獨逸日記
Auerbach's Keller 1884-1888



晩年の鷗外

アウアーバハス・ケラー出版の本

出典: アウアーバハス・ケラーのホームページ

鷗外は、前述の (1862~1922) も、アウアーバハス・ケラーというレストランを訪れている。ライプツィヒにいた井上哲治郎 (のちの東京大学哲学科教授。号は巽軒) とともにアウアーバハス・ケラーに立ち寄ったのである。

1885 年 (明治 18 年) 12 月 27 日の『独逸日記』に鷗外は次のように書いており、とても興味深い。

夜井上とアウエルバハ窟 Auerbachskeller に至る。ギョエテの「ファウスト」Faust を訳するに漢語体を以てせば如何杯と語りあひ巽軒は終に余に勧むるに此業を以てす。余も戯に之を諾す。

ここで鷗外が当時読んでいた『ファウスト』の話になり、鷗外は思いつきで『ファウスト』を漢語体で訳したら面白い。どうだろうか?」と言ってみた。すると井上は、「それは面白い。ぜひ君が訳してくれ」と言った。そこで鷗外は「ぜひやろう」とたわむれに答えた、というのである。

一時の思いつきだったのだが、鷗外はその後本格的に翻訳に取り組み、ついに 28 年後の 1913 年に『ファウスト』の日本語訳を発表した。ただし、漢語体ではなかった。この鷗外訳は、後の訳にも大きな影響を与え、またそれ自身が読み継がれていくことになる。

つまり、アウアーバハス・ケラーでの鷗外と井上の戯れ言は、文学史上の大事件であったことが、あとでわかるのである。

アウアーバッハス・ケラー内の鷗外と哲治郎の絵

アウアーバッハス・ケラーの中は、『ファウスト』に関する絵の博物館のようになっている。その中には、鷗外と井上を描いた 3.16 メートル× 1.8 メートルの壁画がある（左下の絵）。これは 2009 年に、ライプツィヒ派の画家ボーレンツが描いたものである。

絵の左から、メフィストフェレス、当時の軍服姿の鷗外、ファウスト博士、井上哲次郎、晩年の鷗外をあらわしている。ひとつの絵に 2 人の鷗外がいるのは不思議であるが、よく見ると、右端の鷗外のすぐ左には煙のようなものが上から下へと流れていて、晩年の鷗外が若き頃を回想しているシーンであることがわかる。だからファウストもメフィストフェレスも同じ画面にいる。鷗外の後ろのネクタイ姿の人は現代のこの店の人であり、現実と空想、過去と未来が混在したマンガのような絵である。『ファウスト』を訳した鷗外を讃えた絵だというのが、日本人観光客のウケを狙って描いたもののようにも思える。

このレストランは日本人観光客が多く、店内では森鷗外の日記の小冊子『森鷗外の独逸日記』も売っていたし（右の写真）、店のホームページにも日本語のページが作ってある。とはいえ、ドイツ語や英語のページにも、日本の作家森鷗外がここに来たことがきっかけで『ファウスト』を訳したという日独の交流を述べており、そのことを素直に誇っている。

1885 at that time Mori Ōgai (1862-1922) was working as a military hygienist in Germany. Together with his friend Inoue Sonken who studied philosophy in Heidelberg, he paid a visit to Auerbachs Keller. Later he wrote in his diary that they both had been considering whether it were possible to translate "Faust" into Japanese. And, indeed, in 1913 his translation of the "Faust" drama was published in Japan. Until today it is valid as authorized translation and has given a decisive impetus to the interest of Japanese people in German culture.

グルメとか買い物とか感覚を楽しませるだけの海外旅行よりは、こうした文化的な交流に触れる海外旅行にお金を使うほうがずっとましだろう。

近代日本哲学の父 井上 哲次郎

鷗外とアウアーバッハス・ケラーを訪ねた井上哲次郎（1856 ～ 1944 年）はスケールの大きな学者である。東京開成学校から東京大学文学部に入学し、文学部の第 1 回卒業生となった。卒業後は、文部省御用掛となり、「東洋哲学史」を編纂した。1882 年には、東京大学助教授となる。1882 年には、外山正一、矢田部良吉と『新体詩抄』を刊行し、新体詩運動をおこした。

1884 年に、28 歳で、文部省からドイツ留学を命じられた。ベルリン大学を中心として、ハイデルベルク、ライプチヒ、ハレ、イエナ、フランクフルトなどのドイツの大学や、パリの大学にも行った。著名な教授の著書を読み、講義を聴き、自宅を訪ねて議論した。3 年の予定を過ぎて期間延長を申し出たが、認められなかった。そこで、官費ではなく私費滞在に切り替えた。後半の 3 年間は、ベルリン大学の附属東洋語学校の講師をしながら費用を作った。帰国したのは 1890 年であり、留学は約 7 年にもわたった。

帰国後は、東京帝国大学文学部の哲学科の教授となった。官費を私費に切り替えるということは、退職することなので、帰国したらポストはなくなっているのが普通である（だから現代の留学生は、いくら留学を続けたくても、泣く泣く帰国するのである）。これだけ長いわがままが許され、帰国してそのまま元のポストに戻れたということは、よほど文部省から彼が高く評価されていたか、当時の大学制度がいかげんだったかのどちらかだろう。井上は日本人初の哲学の教授だという。のちに東京帝大文科大学学長（といっても文学部長のこと）となった。

井上と鷗外のアウアーバッハス・ケラー訪問

鷗外は、井上よりも 6 歳年下であるが、留学したのは同じ 1884 年であった。

鷗外は、1884 年 10 月から 1885 年 10 月 11 日までライプツィヒに滞在し、10 月 11 日にはドレスデンに移動した。

一方の井上は、ベルリンやハイデルベルクを回っていたので、ライプツィヒに滞在したのは 1885 年 9 月 5 日から 1886 年 4 月 3 日までであった。前述のように、1885 年 10 月からの 1 学期にヴントの講義を聞いたと思われる（意外にも、鷗外とヴントがわずかのところですれ違っていたのである）。

したがって、2 人が同時にライプツィヒにいたのは 1885 年の 9 月 5 日から 10 月 11 日までの 1 月ほどにすぎず、この間に会うことはなかった。2 人がアウアーバッハス・ケラーを訪ねた 1885 年 12 月には、鷗外はドレスデンからライプツィヒに遊びにきていた。正月の休みで、鷗外はライプツィヒのフォーゲル夫人宅に遊びに来ており、その時に、ライプツィヒにいた井上とともにアウアーバッハス・ケラーに立ち寄ったのである。

ちなみに、入口のファウスト像が作られたのは 1913 年のことなので、1886 年に訪ねた鷗外と井上はこの像を見ていない。

井上哲次郎のヨーロッパ留学

井上のヨーロッパでの軌跡を下を表に示す。この表を見ると、ベルリン、ハイデルベルク、ライプツィヒとドイツ国内を半年～1 年ごとに移動している。ドイツだけでなくパリの大学にもいき、さらに大学だけでなくヨーロッパ各地を旅行したり、学会に参加している。官費留学から私費留学に替えたことといい、このアクティビティといい、スケールの大きさを感じる。

そういえば鷗外も、ライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンと大学間を移動している。明治・

大正時代のヨーロッパ留学生は、あちこちの大学を渡り歩くのがスタイルだったようである。これに対して、現代の留学は、1カ所に滞在して、じっくり腰を据えて勉強・研究することが多く、あちこちの大学を渡り歩くことは少ない。

私の「ドイツ アカデミック街道を歩く」の発想はこうした明治・大正時代のヨーロッパ留学生たちである。

井上哲次郎のヨーロッパ留学の軌跡

1884年4月	ベルリン着。下宿開始。個人教授で哲学・語学を学ぶ。
1884年8月	ハイデルベルグに移動。ミュラー教授宅に下宿。10月大学入学。
1885年9月	ライプツィヒに移動。10月大学入学。
1886年4月	ベルリンに移動。4月大学入学。9月ウィーンの万国東洋学会に出席。
1887年3月	パリに移動。ソルボンヌ大学で受講。
1887年9月	ベルリンに移動。ベルリン大学付属東洋語学校講師となる。
1888年8月	ロンドンに滞在。パリ・ジュネーブ・ベルン・ルツェルン・ミュンヘン・ウィーン・ドレスデンを旅行。
1889年8月	ストックホルムとクリスチャニア（現オスロ）の万国東洋学会に出席。
1890年8月	ベルリン出発し、帰国

出典：真田治子「井上哲次郎の欧州留学と『哲学字彙』第三版の多言語表記」埼玉学園大学紀要、第7号、2007年

2-2. 自然科学系学部（ヨハニス・アレーの東側）



ヨハニス・アレーの東側には、ライプツィヒ大学の自然科学系の学部・研究所が並んでいる。ライプツィヒの自然科学は世界的に有名であり、この大学に関係したノーベル賞受賞者は9名に登る。ヨハニス・アレーの最も北には地理学の建物がある。こちらは、トラムだとオスト広場駅に近い。その南には、生物学研究所と植物園がある。植物園の入口を入ると、大きな温室がある。その南には、物理学・地球科学部と化学・鉱物学部とがある。ライプツィヒ大学の物理学と化学は有名である。

物理学科とハイゼンベルク



植物園の南には物理学・地球科学部がある。物理学・地球科学部は、大通りから少しはずれ、向かいには公園で、静かな場所である。中庭を囲んで、5階建ての地味だが清潔な建物が建っている。

物理学科で、1834 ～ 39 年までの短期間だが教授をつとめたのは、フェヒナーである。彼はウェーバー・フェヒナーの法則の発見者で、精神物理学の創始者である。フェヒナーについては、第 1 章のヴントの先駆者のところで述べたとおりである。

ライプツィヒ大学の物理学科を世界的に有名にしたのは、ハイゼンベルクである。ベルナー・ハイゼンベルク（1901 ～ 1976 年）は、ヴェルツブルクに生まれ、ミュンヘン大学とゲッティンゲン大学で学んだ。23 歳の時に、コペンハーゲンのニールス・ボーアのところに留学し、不確定性原理を導いて量子力学の確立に大きく貢献した。1927 年、26 歳で、ライプツィヒ大学の理論物理学の主任教授となり、1932 年、31 歳でノーベル物理学賞を受賞した。1943 年にベルリン大学に移るまで、16 年間ライプツィヒで研究した。

第二次大戦中に、ドイツの原爆開発に携わったが、ハイゼンベルクがこれにかかわったと知り、アインシュタインがアメリカの原爆開発を推進するきっかけになったと言われる。戦争中は、連合軍からの暗殺対象とされていたようだ（連合軍にとっては悪役のマッドサイエンティストとして映っていたのだろう）。終戦後には、一時、イギリスに軟禁された。戦後は 1970 年までマックス・プランク物理学研究所の所長を務めた。自伝『部分と全体』は日本でもよく知られている（山崎和夫訳、みすず書房）。

ちなみに、ハイゼンベルクがいた理論物理学研究所は、近くの Brüderstraße 16 にある。

現在のドイツ首相のメルケルは、ライプツィヒ大学（当時はカールマルクス大学）の物理学科の出身である。

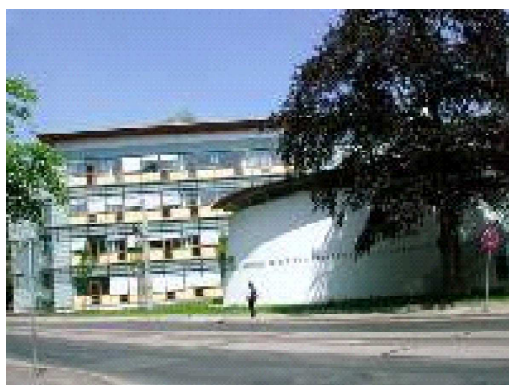
ノーベル物理学賞の朝永振一郎も研究

ライプツィヒ大学関係のノーベル賞受賞者 9 名のうちのひとり朝永振一郎である。

朝永振一郎（1906 ～ 1979 年）はライプツィヒに留学した。朝永は、京都帝国大学理学部物理学科を卒業し、理化学研究所の仁科芳雄研究室の研究員となった。1938 年から 1 年ほど、ライプツィヒのハイゼンベルクのもとで研究した。その時の体験は、随筆集『鏡の中の世界』（みすず書房）に描かれている。1965 年に、日本人としては湯川秀樹に続く 2 人目のノーベル物理学賞を受賞した。

化学科とオストヴァルト

化学科とオストヴァルト



オストヴァルト



池田菊苗



出典: wikipedia

化学・鉱物学部はヨハンニス・アレーとフィリップローゼンタール通りの角にある。この敷地は、前述のように、以前は医学部精神科の病院であった。その裏には、数字がたくさん書いてある円形の建物がある。

ライプツィヒ大学の化学者として有名なのは、ノーベル化学賞を受賞したオストヴァルトである。ヴィルヘルム・オストヴァルト（1853 ～ 1932 年）は、ロシア領のリガで生まれ、34 歳でライプツィヒに移り、ライプツィヒ大学で教授をつとめた。肥料や爆薬の大量生産を可能にした硝酸の製法であるオストヴァルト法を発明した。1909 年に、触媒作用・化学平衡・反応速度に関する業績が認められ、ノーベル化学賞を受賞した。

池田菊苗：うまみの科学的解明

オストヴァルトのもとには、池田菊苗が留学した。池田菊苗（1864 ～ 1936 年）は、帝国大学理科大学化学科（のちの東京大学理学部化学科）で学び、そこの助教授となった。1899 年、35 歳の時に、ライプツィ

ヒ大学のオスワルドのもとに留学した。2年間をライプツィヒで過ごした。

帰国後、東京帝国大学理科大学化学科教授となり、物理化学という分野を日本に導入した。池田菊苗でよく知られているのは、味覚のひとつである「うまみ」をもたらす成分が L-グルタミン酸ナトリウムであることを発見したことである。池田は、グルタミン酸を主要成分とする調味料製造法の特許を得て、その会社を作り、「味の素」と名づけて販売した。

ちなみに、池田が留学を終えてロンドンに一時滞在した際には、夏目漱石と同じ下宿に住んだことは有名である。当時精神のバランスを崩していた漱石のよき友人となり、日記にもよく出てくる。漱石の文学論にも大きな影響を与えた。イギリスの食事をした人ならば、誰でも「うまみ」がないことに気がつくが、池田のイギリス体験がうまみ成分発見に寄与したのではなかろうか（イギリスに留学した人すべてが発見をするわけではない）。

東京大学理学系研究科のホームページによると、池田は「1907年に約 38 kg の昆布から煮汁をとり、ついにうま味の素である L-グルタミン酸ナトリウム約 30 g を得ることに成功しました。このとき昆布を煮詰めるために用いられた英国製の大蒸発皿は、当時の貴重な資料として、池田教授－鮫島教授－赤松教授－黒田教授－太田教授－当研究室へと受け継がれています」（大越慎一教授）とのことである。

出典：<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/ja/story/newsletter/treasure/02.html>

2-3. 精神科・獣医学部地区



第3に、フィリップ・ローゼンタール通りを東南に行き、精神科と獣医学部を訪ねてみる。

トラムを使うと、ドイツ図書館（ドイッチェ・ビュッヘライ）駅である。前述のように、ヨハニスアレー駅から無理して歩いていけないこともない。

この駅の周辺を俯瞰したのが、上の写真である。

ドイツ図書館駅のすぐ北側には、ロシア記念教会があり、これがランドマークとなっている。右上の写真のように、クレムリンのような金色の玉ねぎ頭の塔が立っていて、ロシア正教会の教会とわかる。

フィリップ・ローゼンタール通りは、ここから東北の方に分岐しており、これがゼンメルヴァイス通り *Simmelweisstraße* である。この通りに①ライプツィヒ大学医学部の精神科がある。

フィリップ・ローゼンタール通りの南側に、②国立図書館がある。さらにその南には、楕円形のドイツ広場がある。その南側に③マックスプランク進化人類学研究所がある。その南には、④ライプツィヒ大学の獣医学部の敷地がある。その南側は、アン・デン・ティーアクリニケン通り（動物病院脇通り）である。その南にある2つの円形の建物は、サーカス小屋（コールラビ・サーカスの未来研究所という建物）である。さらに西側には鉄道の駅がある。

これら①～④を順に歩いてみることにしよう。

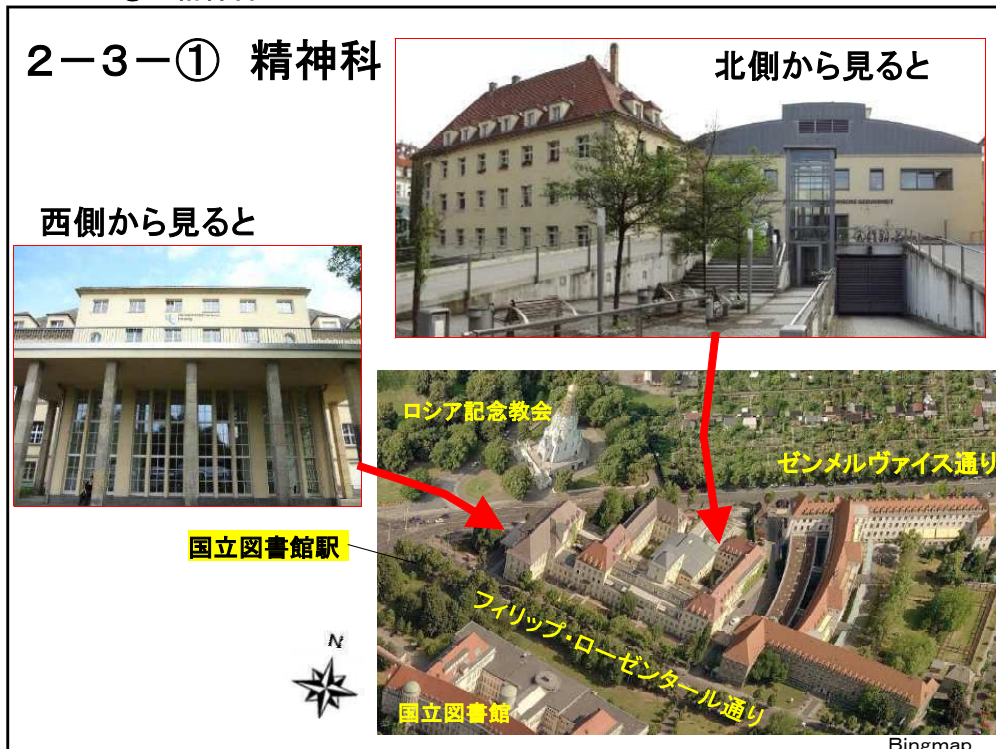
2-3-① 精神科

2-3-① 精神科



13 番は、精神科の建物。精神科・精神療法科と書かれている。ゼンメルヴァイス通り 10 番地。
 14 番は、Innovation Center Computer Assisted Surgery (ICCAS)
 14 番の建物の前には、対症療法 Palliative Care と書いてあった。
 フィリップ・ローゼンタール通りの側は、W社会医学研究所などが入っている。

2-3-① 精神科



精神科の建物を西側から見ると、大学病院と大きく書かれている。
 ゼンメルヴァイス通りに回り込むと、精神科のセンターがある。精神科のビルの前は少し広く、ベンチが置いてある。大学心の健康センターという表示もあった。

ライプツィヒ大学の精神科の歴史

ライプツィヒ大学精神医学の主任教授

ハインロート



フレヒジヒ



ブムケ



シュレーダー



ボエストロエム



ワグナー



出典:ライプツィヒ大学精神科ホームページ

ライプツィヒ大学の精神科の歴史は長く、ドイツにおける精神医学の発祥の地といっても過言ではない。

◆ライプツィヒ大学精神科の主任教授

在任期間	主任教授	正式名称
1811 ～ 1843	ハインロート J.C. Heinroth	心の治療
1878 ～ 1920	フレヒジヒ P. Flechsig	精神医学
1921 ～ 1924	ブムケ O. Bumke	精神医学・神経学
1925 ～ 1938	シュレーダー P. Schröder	精神医学・神経学
1939 ～ 1942	ボストロエム A. Bostroem	精神医学・神経学
1942 ～ 1945	ワグナー W. Wagner	精神医学・神経学
1946 ～ 1952	ファイファー R.A. Pfeifer	精神医学・神経学
1952 ～ 1964	ミュラー-ヘゲマン D. Muller-Hegemann	精神医学・神経学
1965 ～ 1973	シュワルツ B. Schwarz	精神医学
1973 ～ 1995	ヴァイゼ K. Weise	精神医学
1995 ～ 2006	アンゲルマイヤー M.C. Angelmeyer	精神医学
2006 ～	ヘゲール Ulrich Hegerl	精神医学

ハインロート

1811年にハインロート（1773～1843）がライプツィヒ大学医学部の「心の治療 Psychische Therapie」の助教授となった。これはヨーロッパの大学で最初の精神医学の講師であるという。1819年には教授となった。彼はライプツィヒのセント・ゲオルゲ病院で学生の教育に当たった。

彼は、1818年に『心の障害または精神障害と治療の教科書』を書いた。これはドイツで最初の精神医学の教科書とされる。ハインロートは、ロマン派の精神医学の代表者であり、キリスト教的な観点から精神医学を論じた。精神病の身体主義を批判し、心理主義の観点に立った。彼はライプツィヒ大学の医学部長をつと

めた。

しかし、ハインロートの死後、精神科のポストは空席のままとなった。

フレヒジヒとシュレーバー症例

35年後の1878年に、ようやくパウル・フレヒジヒ（1847～1929）が、ライプツィヒ大学の精神医学 Psychiatrie の教授となった。彼は前述の生理学者カール・ルードヴィヒの弟子の脳解剖学者であり、脳局在論で大きな業績をあげた。

精神科クリニック



1882年、フレヒジヒの時代に、精神科の大学病院の病棟も完成した。

前述の「鵬外の留学時代の大学病院 1909年の地図」に、昔の精神科クリニックが出ていた。

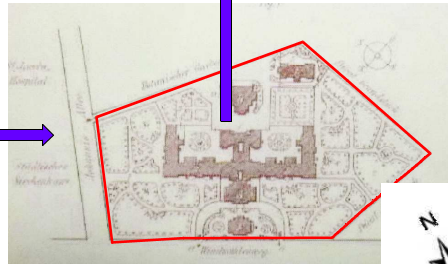
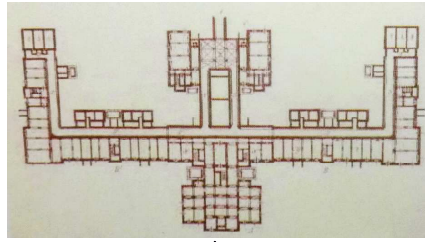
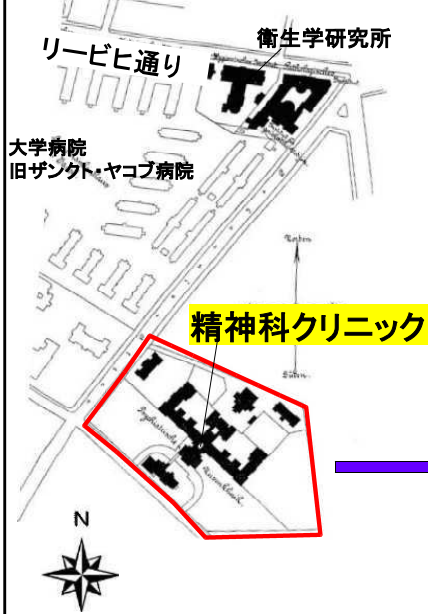
1909年の地図と今の地図を比較しよう。ヨハンニス・アレーと現フィリップ・ローゼンタール通りの角に、ホームベースの形をした五角形の広い敷地があり、その真ん中に精神科クリニックが建っていた。

現在、その五角形の敷地は、植物園、化学・鉱物学部と物理学・地球科学部の敷地に当たる。

精神科クリニックの配置図

精神科クリニックの配置図

1909年の地図



出典:ライプツィヒ大学ホームページ

1882年に完成した病院は、当時のドイツでは最大規模の精神病院のひとつであった。

病院の配置図（右上の写真）をみると、中央棟と左右の両翼からなる。すべてが3階建てであった。

中央棟は管理棟であり、院長室、医局、助手室、講義室、研究室などからなる。研究室には、フレヒジヒの脳解剖学研究室と脳のコレクション室があり、

左右両翼は、それぞれ男子棟と女子棟である。

この建物は1943年に空襲で破壊された。

なお、フレヒジヒの脳解剖学研究室は、1927年には、脳科学研究所として病院から独立し、1975年にはライプツィヒ大学「パウル・フレヒジヒ脳科学研究所」と改名されて、市の西部へと引っ越した。

フレヒジヒとシュレーパー症例

ところで、フレヒジヒの時代、大学病院に入院していた患者に、ダニエル・シュレーパーという人がいた。妄想などをもっていて、彼は自分の体験や教授のフレヒジヒの印象などを手記として発表した。このシュレーパーの手記をもとにして、フロイトは1911年に「シュレーパー症例」の論文『自伝的に記述されたパラノイアの症例に関する精神分析的考察』を書いたことは有名である。この中で、妄想の根底には、無意識の同性愛的傾向があることを指摘したのである。フレヒジヒに対する陽性転移と陰性転移は、父親との関係の投影であるとしたのである。

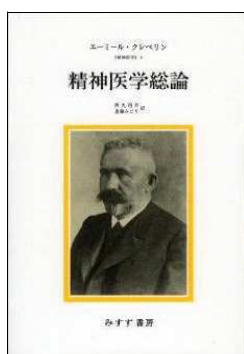
また、のちに、シャッツマンは、このシュレーパーの手記と、その父親の手記とをつきあわせて、親の厳しすぎるしつけが狂気に向かうとして『魂の殺害者－教育における愛という名の迫害』（シャッツマン、岸田秀沢、草思社）という本を書いた。

クレペリンとライプツィヒ大学

クレペリン



出典: wikipedia



呉秀三



内田勇三郎



出典: 日本・精神技術研究所

1882年にできたライプツィヒ大学病院の最初の医師のひとりが、クレペリンであった。クレペリンは、精神医学に最も大きな影響を与えた学者であるといっても過言ではない。現代の精神医学に影響を与えた学者をひとりだけあげろ、と言われたら、クレペリンの名前をあげる精神医学者が多いだろう。

クレペリンは、おもにハイデルベルク大学とミュンヘン大学で活躍したが、ライプツィヒとも関係が深い。

クレペリンの仕事の場所

年	年齢		都市
1856 年		ドイツ北部のノイシュトレッツに生まれる	
1874 年	18 歳	ライプツィヒ大学で医学を学ぶ	ライプツィヒ
1878 年	22 歳	ヴュルツブルク大学で学位	ヴュルツブルク
1878 年	22 歳	ミュンヘンで研修医	ミュンヘン
1882 年	26 歳	ライプツィヒ大学 神経学クリニックとヴントのもとで仕事	ライプツィヒ
1886 年	30 歳	ドルパト大学（現在はエストニア領）教授	ドルパト
1890 年	34 歳	ハイデルベルク大学精神医学教授	ハイデルベルク
1903 年	47 歳	ミュンヘン大学精神医学教授	ミュンヘン
1917 年	61 歳	ドイツ精神医学研究所を創設し兼務	ミュンヘン

クレペリンはドイツ北部のノイシュトレッツに生まれた。フロイト（1856 ～ 1939 年）と同じ年の生まれである。

クレペリンは、ライプツィヒ大学で医学を学んだ。この時、フレヒジヒのもとで精神医学を学び、ヴントのもとで心理学を学んだ。学位を取ったのはヴュルツブルク大学である。その後、ミュンヘンで研修をした。

1882 年からライプツィヒに戻って、大学病院の神経学クリニックのヴィルヘルム・エルブと、心理学のヴントのもとで研究した。この間に「精神医学における心理学の位置」という論文を書いた。クレペリンは、精神医学教授のフレヒジヒをあまりよく思っていなかったようで、むしろヴントの実験心理学の方法に興味を持ち、ヴントの実験室に入り浸っていた。クレペリンは、ここで連想についての実験や作業曲線の実験をおこなった。こうしたクレペリンの実験にヒントを得て、日本の内田勇三郎が開発したのが「内田クレペリンテスト」である。

クレペリンはその後、ハイデルベルグ大学の精神医学教授となった。この活躍については、私の「ハイデルベルクを歩いてみよう」を参照いただきたい。 <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/>

また、ミュンヘン時代の活躍については、「ミュンヘンを歩いてみよう」で述べる予定である。

クレペリン主義

ライプツィヒ時代の 1883 年、27 歳のクレペリンは、結婚を控えていたたので、金のために、『精神医学摘要』を書いた。有名な精神医学教科書の第 1 版を書いた。このテキストはのちに何回も改訂されていくこ

とになる。クレペリンは、彼は、その後もこのテキストを何回も改訂し、第8版（1909～1915年）を発表した。そして、第9版の途中まで出版したところで終わった。これが今日の精神医学の診断体系のもとになったのである。

クレペリンの考え方は、精神疾患も、一般の身体疾患の場合と同じように、原因、症状、転帰、組織病理といった情報を総合して、「疾患単位」を確立しようとした。それによって精神疾患を分類しようとした。クレペリンの時代は、生物学的精神医学がさかんになり、脳や身体の「原因」を追求する手段が発見され、生物学的原因をもとにして精神疾患を分類・診断する方法が脚光をあびた。しかし、クレペリンは、こうした生物学的な「原因論」を無視はしなかったが、むしろ、精神疾患の経過や予後、統計といった「現象論」からの分類を重視した。

そこから、早発性痴呆（現在の統合失調症）と躁鬱病という二大精神病の枠組みを作ったのである。「早発性痴呆」という用語で、統合失調症をひとつの疾患単位と初めて認めたのがクレペリンである。彼は、それまでバラバラに考えられていた破爪病・緊張病・妄想病をひとつの疾患単位としてまとめたのである。のちにこれを「統合失調症 Schizophrenia」（以前は精神分裂病と訳されていた）と命名したのがブロイラーである。

疾患単位を確立しようとした試みが、クレペリンの時代に完全に成功したというわけではない。とはいえ、「原因論」には踏み込まず、「現象論」から総合して分類・診断するという方法は、現代の「操作的診断基準」に受け継がれている。その代表はアメリカ精神医学会の『精神障害の診断と統計マニュアル（DSM）』や世界保健機関の『国際疾病分類（ICD）』であり、その考え方は「新クレペリン主義」と呼ばれるのである。

クレペリン主義は日本精神医学のスタンダードに

日本の精神医学と精神医療を建設したのは、東京帝国大学医科大学の教授だった呉秀三（1865～1932年）であるが、呉がドイツ・オーストリアに留学したのは1897年から1901年の間であり、その後半はハイデルベルクのクレペリンのところに行った。クレペリンの教科書の第6版から7版にかけての時期であったので、日本には当時のクレペリンの最新学説を持ち込んだことになり、クレペリンが日本の精神医学界のスタンダードとなった。

また、ミュンヘン時代のクレペリンを訪ねたのが斎藤茂吉である。彼はクレペリンに握手を求めたが、拒絶されて、そのことを一生恨んでいた。これについては、「ハイデルベルクを歩いてみよう」を参照いただきたい。

内田勇三郎の内田クレペリンテスト

また、クレペリンとヴントの作業曲線の実験をもとに、日本の心理学者内田勇三郎（1894～1966年）が開発したのが「内田クレペリンテスト」である。このテストは、今日の臨床心理学ではあまり使われなくなったが、一時はよく利用されていたものである。私も若い頃、精神科の臨床でよく使った。

「内田クレペリンテスト」というテスト名をみて、内村祐之（内村鑑三の息子で東京帝国大学医学部精神科教授）は、「クレペリン法」と呼べばよいのに、「あれしきの変法」を加えただけで「内田」の名前を冠したことがけしからんと思っていたという。

内田勇三郎君が少しモディファイしたクレペリンの連続加算法が・・・使われていた。内田君は、松沢病院の心理研究室で、このテストを長く手がけていた心理学出身のヴェテランで、そのころは、このテストが最良の性格診断法だと確信していたようである。私としては、あれしきの変法に「内田＝クレペリン法」と、自分の名を冠するのさえ、何とも厚かましい所業だと不愉快に思うのだが、それよりも、もっと我慢がならないのは、内田氏らが、このテストに、性格診断法としての高い評価を与えていたことだ。

出典：『わが歩みし精神医学の道』みすず書房

ここからも、当時の精神医学者にとってクレペリンが神のような存在であったことがわかる。

メビウスと病跡学

フレヒジヒの時代に、ライプツィヒ大学で活躍したのはパウル・メビウス（1853～1907）である。メビウスは1898年に『ゲーテ』という本を書き、ゲーテの躁鬱の7年周期を見出した。また、ニーチャールソンの研究を行なうなど、精神医学的な天才論の創始者である。「パトグラフィ（病跡学）」という用語を作ったのはメビウスである。彼はライプツィヒ大学の講師であったが、女性を蔑視する論文を書いて世間から反感をかった。このことは、クレッチマーの『天才の心理学』（岩波文庫）の中に登場する。また、大学当局とトラブルをおこしたりしたことでも有名になった。

ブムケ

フレヒジヒは1920年に引退し、1921～1924年までは、ブムケ（1877～1950）が教授となった。神経学者であり、彼は生物学的な志向が強かった。講座名は、ここから精神医学・神経学 Psychiatrie und Neurologie となった。ブムケは神経科医はあったが、精神科の診療においては、広く総合的に患者の情報を集めて、人

間的な理解も重視した（内村祐之『わが歩みし精神医学の道』）。ただし、精神分析学に対しては、その極端な心理主義を嫌って、批判的な態度を貫いた。ブムケは、1924 年に、クレペリンの後任として、ミュンヘン大学に移った。そこで、クレペリンのドイツ精神医学研究所への移動について、クレペリンと少しもめたようだ。ブムケは、レーニンが病気になったとき、モスクワに呼ばれて、神経病医としての診断を求められたことで知られている。

シュレーダー

1925 ～ 1938 年まではシュレーダー（1873 ～ 1941）が教授をつとめた。シュレーダーも、身体因を重視する生物学的な精神医学者として有名である。シュレーダーは、児童・青年期の精神医学にも力を入れ、大学病院に、児童心理相談センターや、青年サイコパス部門などを作った。それらは現在、リーマン通りにある「児童・青年精神医学・心理療法・心身医学病院クリニック」（後述）となって現在に至っている。

第二次大戦中の空襲で、1943 年に大学の精神科病棟は消失した。そこで、精神科はあちこちの建物に分散した。

東ドイツ時代

終戦によって、ドイツは分割され、ライプツィヒは東ドイツ領になった。ライプツィヒ大学はカール・マルクス大学と変わった。1952 年から 64 年までは、ミュラー・ヘゲマンが精神科の教授をつとめた。ヘゲマンは、これまでの生物学路線から、社会精神医学へと変換した。心理療法を大きく取り入れ、「積極的心理療法」を唱えた。彼は、東ドイツ時代の最も有名な精神医学者であった。

それに続く、シュワルツとヴァイゼも同じ路線をとり、2 人は『社会主義社会の社会精神医学』という本を書いて、大きな影響を与えた。1966 年にはすべての閉鎖病棟は解放され、集団療法も始まり、治療的コミュニティの原理が重視された。1974 年には、心理療法科がつくられた。これは後述する心理療法心身医学クリニックの前身である。

現在の精神科

1995 年からマチアス・アンゲルマイヤーが精神科教授をつとめ、現在に至っている。1996 年から現在の位置に精神科の外来の建物も作られるようになった。この外来では、教授のアンゲルマイヤーが中心となって、パニック障害や強迫性障害に対して、認知行動療法をおこなっている。認知行動療法はドイツにも確実に定着しつつある。

2-3-② ドイツ国立図書館（ドイツの本と文字の博物館）

2-3-② ドイツ国立図書館(ドイツの本と文字の博物館)



ドイツ国立図書館

フィリップローゼンタール通りをはさんで、精神科の南は「ドイツ国立図書館」の巨大な建物がある。トラムのドイツ図書館駅のすぐ前である。

ドイツの本と文字の博物館：レクラム文庫の発祥の地ライプツィヒ

ドイツ国立図書館の中には、ドイツの本と文字の博物館 Deutsche Buch- und Schriftmuseum がある。ライプツィヒに関連した出版の歴史が展示されている（入場2ユーロ）。

ライプツィヒは、出版社や印刷所が多いことで有名であり、世界初の新聞もライプツィヒで発刊された。岩波文庫のモデルとなったレクラム文庫も、ライプツィヒで創刊された。楽譜も裏長紙にライプツィヒと書かれたものが多いという。

2-3-③ マックス・プランク進化人類学研究所

2-3-③ マックス・プランク進化人類学研究所

鳥瞰写真



写真の
アングル

正面の半月形の建物



研究所の中庭



研究所の中庭



ドイツ国立図書館の南には、楕円形のドイツ広場がある。その広場の南側にマックスプランク進化人類学研究所がある。住所は Deutscher Platz 6。

広場に沿って、半月形をなす5階建ての新しい建物がある。その奥にも、中庭を囲むように建物がある。建物の中庭には熱帯風の池まで作ってある（日本の研究所の殺風景な作りとは対極にある）。

マックスプランク進化人類学研究所の内部

マックスプランク進化人類学研究所の内部

吹き抜けのロビー



霊長類のディスプレイ



オランウータン像



宙ぶりの講演室



ボルダリングの設備



正面の建物を入ると、中は5階まで吹き抜けのロビーとなっていて、空間を贅沢に使っている。フロアには、霊長類についてのディスプレイが飾っており、オランウータンの巨大な像などもあり、かなり金をかけている。

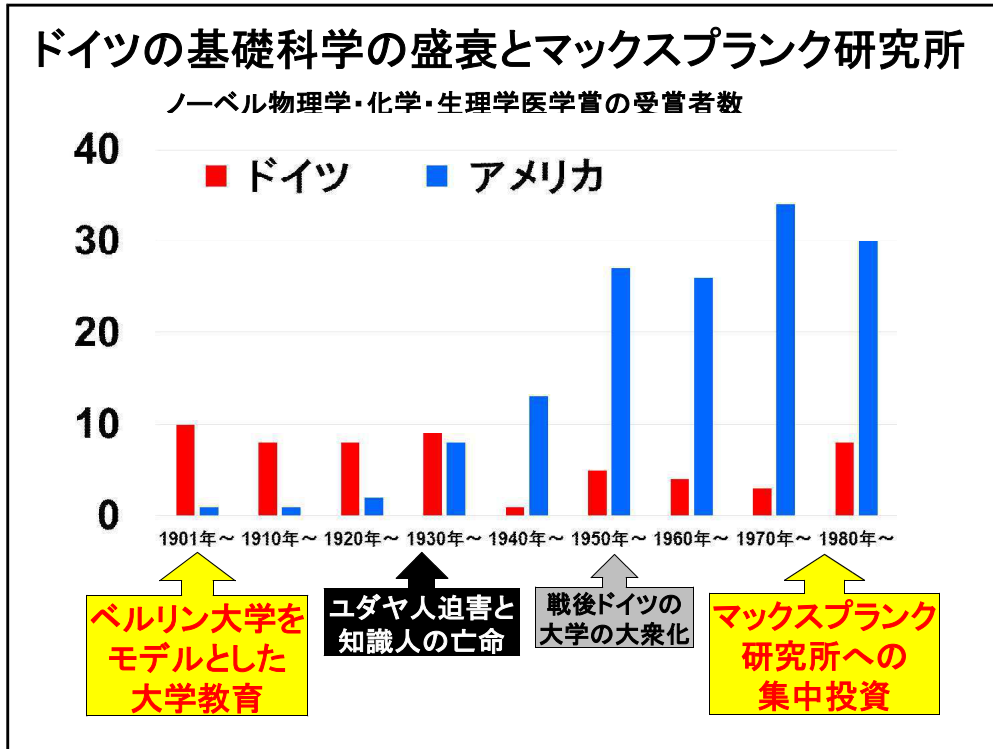
吹き抜けの上には、講演室が宙ぶりで浮かんでいる。

フロアにはボルダリングの設備がある。私たちが訪れた 2005 年にはまだ珍しい施設であった。フィールドワークの練習をするという名目で作ったのだとか。

建物の最上階には個室の宿泊施設まである。

研究所としてはぜいたくで、基礎研究者にとっては夢のような場所である。なぜこのような研究所が可能になったのだろうか。それはドイツの大学と科学研究の歴史をみればわかる。

基礎科学の中心はドイツからアメリカへ



もともと大学教育の発祥の地は、ドイツのベルリン大学である。1810年に作られたベルリン大学には、言語学者・哲学者のフンボルトがあらわれて、近代の大学教育のシステムを作り上げた。①純粋学問の追究、②研究と教育の一致、③教授会の自治権という3原則を作ったのは、フンボルトである。②研究と教育の一致とは、大学ではカリキュラムを作って教えるのではなく、教官が研究していることを教えれば、それが教育になるという考え方である。つまりエリート教育の理念である。文科系はゼミナールで教育し、理科系は実験室で教育するというシステムを作ったのはフンボルトである。このようなエリート教育は大成を収め、1900年前後のドイツの科学は世界の中心となった。この頃のノーベル賞は、ドイツが独占していた。ドイツの大学システムをモデルとして、アメリカや日本のような新興国は大学を作った。

しかし、ナチスの台頭と第二次世界大戦によって、ドイツの科学は崩壊した。そのかわり、戦後は、アメリカの大学が世界の第一線となった。その理由は、ドイツのユダヤ人の科学者が大挙してアメリカに亡命したこと、アメリカの大学が、フンボルトの思想を取り入れたエリート教育をおこなって成功したことである。

戦後のドイツは、フンボルト流のエリート主義を捨て、平等主義的な教育をおこなったため、大学の大衆化が進み、専門教育のレベルは低下した。その結果、戦後のドイツは基礎科学が遅れてしまい、アメリカに大きく水をあけられた。

このことは、ノーベル賞の受賞者数に明確に現れている。上のグラフに示すように、ノーベル賞の受賞者は、1940年代には、ドイツとアメリカが逆転した。1940年代から、世界の科学の主役は、ドイツからアメリカへと交替したのである。

マックス・プランク研究所への集中投資

こうした危機感から、ドイツ政府は、基礎科学を復興せざるを得なくなった。その方法として、莫大な資金をマックス・プランク研究所に投入したのである。大学に資金を投入したのではなく、マックス・プランク研究所に投入した。世界の有能な研究者を集めて、集中的に投資をして、研究体制を整えた。こうして、研究者にとっては夢のような研究所群が完成した。

マックス・プランク研究所とは

マックス・プランク研究所は、もとはカイザー・ヴィルヘルム研究所といい、アインシュタインも所長をつとめた。マックス・プランク（1858～1947年）は、1918年に量子力学でノーベル賞をとった物理学者であり、1930年にカイザー・ヴィルヘルム研究所の所長となった。しかし、プランクは、ナチスのユダヤ人科学者への処遇に抗議し、辞任した。第二次世界大戦後の1945年に、研究所は、プランクを再び所長として招き、彼の名前をとってマックス・プランク研究所と改名した。

マックス・プランク研究所は、ドイツ内外の各地に83の研究所を持っている。研究所をまとめているの

は、マックス・プランク・ソサエティである。

マックス・プランク研究所は、おもに西ドイツに建てられた。東西ドイツ統一後は、東ドイツ領にも作られるようになった。科学の伝統のあるライプツィヒにも、3つの研究所が作られた。ホームページで都市別に検索できる。

ライプツィヒにある3つのマックス・プランク研究所

研究所名	住所 ホームページ	本稿の章
①マックス・プランク認知脳科学研究所 Max Planck Institute for Human Cognitive and Brain Sciences	Stephanstrasse 1a www.cbs.mpg.de	第2－1章
②マックス・プランク進化人類学研究所 Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology	Deutscher Platz 6 www.eva.mpg.de	第2－3章
③マックス・プランク数学と科学研究所 Max Planck Institute for Mathematics in the Sciences	Inselstraße 22 www.mis.mpg.de	第1章

マックスプランク進化人類学研究所

マックス・プランク進化人類学研究所は、略して MPI EVA と呼ばれる。1998年に作られた新しい研究所である。生物学者、心理学者、言語学者など多分野の専門家が集まり、人間の進化や文化について研究することを目的として作られた。研究スタッフは350人という大所帯である。年間20億円というふんだんな予算を使って、基礎研究をしている。

多くの大学院生も研究しているが、研究所は博士号を出せないで、提携するライプツィヒ大学で学位を取るのだという。

研究所は、①霊長類学、②言語学、③発達・比較心理学、④進化遺伝学、⑤人間進化学の5つの部門からなっている。部門の主任はドイツ人ではなく外国人になってしまったとのことである。

③発達・比較心理学部門の教授はマイケル・トマセロである。トマセロは、言語習得、霊長類研究、比較・発達認知研究のリーダー的存在として知られている。近著『認知の文化的起源』(1999)や、『言語の構成』(2002)では、霊長類との比較研究をふまえて、言語を生み出すヒトの認知能力の本質に迫っている。発達・比較心理学部門の特徴は、系統発生と個体発生の研究を平行して進めていることである。つまり、霊長類と人間の幼児を平行して研究していることである。

霊長類の研究は、ライプツィヒ動物園の中にあるケーラー霊長類研究センターと提携しておこなっている。これについては、第4章で詳しく述べる。

幼児の研究は、ライプツィヒ市内の幼稚園と連携して11,000人の幼児のリストを作って、研究協力者を集めている。この部門の研究者は、研究所と動物園と幼稚園を往復しながら仕事をしている。話を聞いた院生のデニー氏は、オートバイで動物園と研究所を往復していると言っていた。

②言語学部門の教授はバーナード・コムリーである。彼はイギリス人で、言語のタイポロジーの専門家で、言語の普遍性を調べるために、世界中の言語の語彙集を作っている。世界の各地でフィールドワークをおこなって世界の言語の語彙の辞書を作る仕事をしている。夫人は日本人ということであった。

マックス・プランク進化人類学研究所は、私も参加した21世紀 COE プログラム「心とことばー進化認知科学的展開」(拠点リーダー：長谷川寿一東京大学教授)のモデルとなった。私たち COE のメンバーは、2005年3月にこの研究所を訪れ、多くの研究者と交流し、研究組織について学ぶことができた。写真はその時のものである。

2－3－④ 獣医学部 北側の研究所

2-3-④ 獣医学部 北側の研究所

生理学研究所



解剖学研究所



病理学研究所



免疫学研究所



出典:ライプツィヒ大学ホームページ

マックスプランク進化人類学研究所の東隣りは、バイオテクノロジー生物医学センターである。また、マックスプランク進化人類学研究所の南には、ライプツィヒ大学の獣医学部の敷地がある。敷地の西側は、アン・デン・ティーアクリニケン通り（動物病院脇通り）という。獣医学部の北側は、解剖学研究所、病理学研究所、生理学研究所、免疫学研究所が並んでいる。

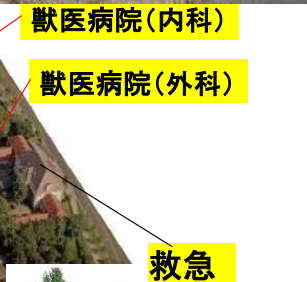
2-3-④ 獣医学部 南側の動物病院

2-3-④ 獣医学部 南側の動物病院

獣医病院(内科)



獣医病院(外科)



救急



鳥病院



小動物病院



出典:ライプツィヒ大学ホームページ

獣医学部の南側は動物病院である。中央には、内科と外科の建物が向かい合っている。内科と外科は、運動場を間にして、対称の形をしている。ほかに、鳥病院、小動物病院、救急の建物が並んでいる。獣医学部は、郊外にも附属の牧畜場を持っている。

ライプツィヒの戦い記念碑

ライプツィヒの戦い記念碑



出典 : wikipedia

プラガー通りを先に行くと、ライプツィヒの戦い記念碑というモニュメントがあり、中に入ることができる。1813年に、侵入したフランスのナポレオン軍に対してドイツ軍が抵抗した。ドイツはこの戦争に勝って、ナポレオン軍を追い出した。この戦勝を記念したモニュメントである。

第3章 ライプツィヒ市 南西部

次に、ライプツィヒ市の南西部にある大学建物を回ってみよう。

<目次>

1 章	旧市街（リング内）
2 章	南東部 2－1．医学部・大学病院（ベイリッシャー広場駅） 2－2．自然科学系学部（ヨハンニスアレー駅） 2－3．精神科、獣医学部（ドイツ図書館駅）
3 章	南西部
4 章	北部

3 ライプツィヒ市 南西部



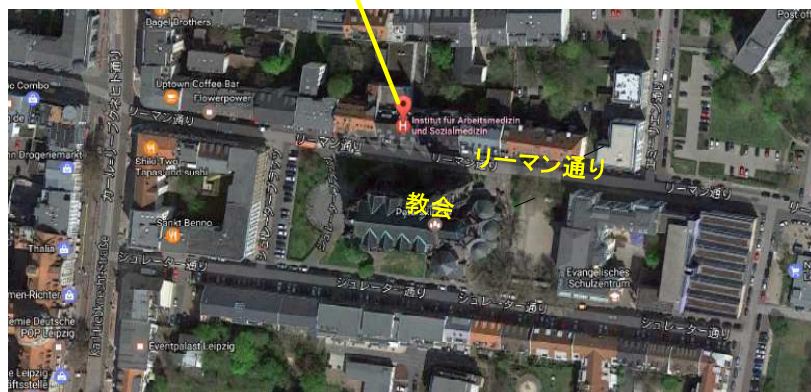
地図の上のほうに書かれているリング（旧市街）の位置からだいたいの位置関係がつかめる。また、右下のほうが南東部の医学部・大学病院地区である。

医学部の真西のリーマン通り社会医学部と精神科・心理療法科の建物がある。その西には、大学図書館と社会科学・哲学部がある。このあたりはベートーベン通り、モーツァルト通り、ハイドン通りなど、大作曲家の名前がついた通りが並んでいる。

児童青年精神科・心理療法科・心身医学科

元 社会医学部 精神科・心理療法科

元 社会医学部
精神科・心理療法科

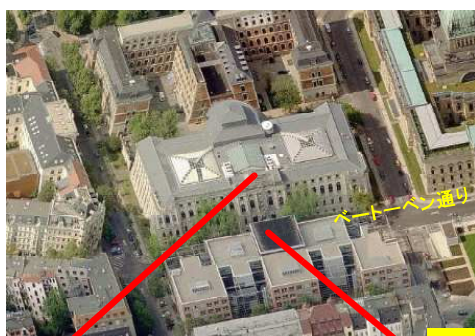


Googlemap

新市庁舎から南へ伸びるペテル・シュタインベグを南に数分歩き、リーマン通りを左に曲がると、すぐに巨大な黒い教会（ペトリ教会）が見えてくる。その向かいのビルがライプツィヒ大学精神科の児童青年精神科・心療内科・心身医学科である。住所は Riemann Strasse 32 - 34. 中央駅から徒歩 15 分ほど。トラムは 10 番か 11 番である。シュレーダーが精神科の教授だった頃に、児童・青年医学も力を入れた。それがこの部門の前身である。ただし、現在は Liebigstraße 20 a に移動したようだ。

ライプツィヒ大学 図書館 社会科学・哲学部

ライプツィヒ大学 図書館 社会科学・哲学部



Bingmap

ライプツィヒ大学図書館

ライプツィヒ大学
社会科学・哲学部



出典:ライプツィヒ大学ホームページ

ベートーベン通りには、ライプツィヒ大学の図書館がある。正面の入口は豪華な飾りがついている。図書館は、シナイ写本やゲーテンベルク聖書などの資料を所蔵している。

その南向かいが社会科学・哲学部の建物である。

ライプツィヒ大学図書館の周辺

ライプツィヒ大学 図書館の周辺



ライプツィヒ音楽・演劇大学

出典: wikipedia



視覚装丁芸術大学



Bingmap



ライプツィヒ大学図書館の周辺には、いろいろな芸術関係の大学が並んでいる。このあたりはベートーベン通り、モーツァルト通り、ハイドン通り、シューマン通りなどが並び、「音楽地区」と呼ばれている。

視覚装丁芸術大学

図書館のすぐ北側には、視覚装丁芸術大学（Hochschule für Grafik und Buchkunst）がある。

1764 年に、ここにライプツィヒの美術院が創設された。前述のように、アダム・エーザーが院長をつとめていた時に、若きゲーテがここに通って絵の勉強をした。その後、美術院は視覚装丁芸術大学となり、ドイツ有数の美術学校として知られている。

ライプツィヒ音楽・演劇大学

図書館のすぐ西側にはライプツィヒ音楽・演劇大学がある。正式名称はフェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ音楽演劇大学ライプツィヒ（Hochschule für Musik und Theater „Felix Mendelssohn Bartholdy“ Leipzig）である。

1843 年に、メンデルスゾーンが「ライプツィヒ音楽院」を作った。メンデルスゾーン（1809 ～ 1847 年）は、ライプツィヒのゲバントハウス・オーケストラの指揮者をつとめ、34 歳の時に、みずから資金を集めてライプツィヒ音楽院を開き、院長となった。ところが彼は 38 歳の若さで病死している。前述のように、彼が亡くなるまで住んでいた家がメンデルスゾーン旧宅として公開されている。

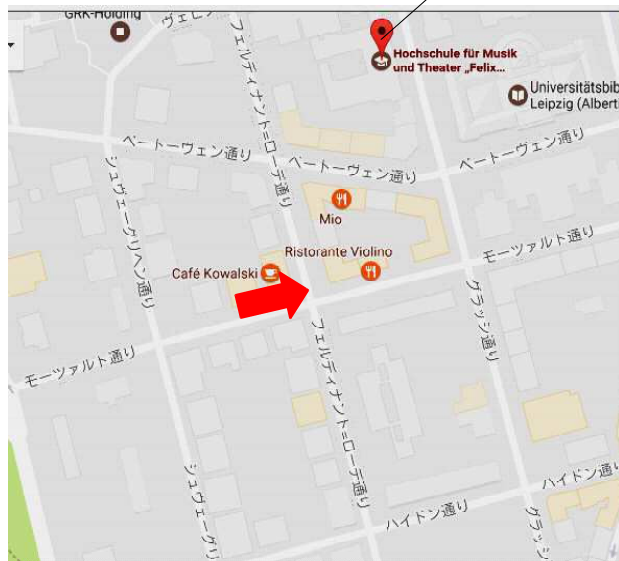
ライプツィヒ音楽院は、1992 年に演劇学部を作り、ライプツィヒ音楽・演劇大学として続いている。

ライプツィヒ音楽院は、1901 年に日本の瀧廉太郎が留学したことでも知られている。

瀧廉太郎の記念碑

滝廉太郎の記念碑

ライプツィヒ音楽・演劇大学



Googlemap

フェルディナント・ローデ通り (Ferdinand-Rhode-Strasse) とモーツァルト通り (Mozartstrasse) の交差点の角



出典: wikipedia

この近くに滝廉太郎の記念碑が建っている。

滝廉太郎 (1879 ~ 1903 年) は、若くして「荒城の月」を作曲して注目され、15 歳で東京音楽学校 (現東京藝術大学) に入学し、卒業後、その研究科に進学した。1901 年、22 歳で、文部省の国費留学生としてライプツィヒ音楽院に入学した。しかし、5 か月後に肺結核となり、帰国を余儀なくされた。帰国後、大分県で療養していたが、24 歳で亡くなった。森鷗外とのドイツ留学とは対照的であるが、当時の留学は命がけのものだったことがわかる。結核で亡くなったため、死後には、多くの作品が焼かれてしまったというから、二重の悲劇である。

記念碑は、滝廉太郎の没後 100 周年を記念して、2003 年に作られた。場所は、地図に示すように、フェルディナント・ローデ通り (Ferdinand-Rhode-Straße) とモーツァルト通り (Mozartstraße) の交差点の角である。この碑の近くに滝廉太郎が住んだ下宿があり、彼はここからライプツィヒ音楽院に通った。

碑には、彼の肖像と当時の家の外観が描かれている。碑文には以下のように書かれている。

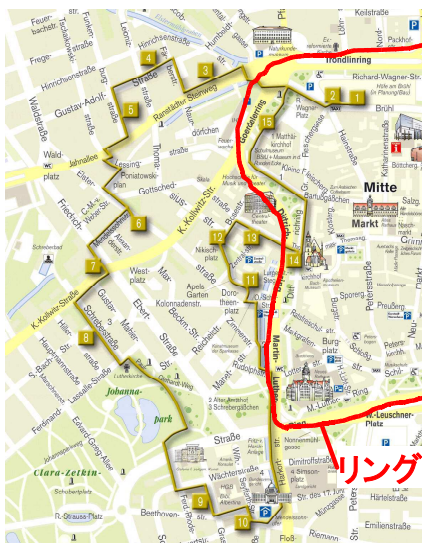
日本で敬愛されている作曲家、滝廉太郎 (1879-1903) は 1901 年から 1902 年の間、フェルディナント・ローデ通り 7 番に住み、ライプツィヒ音楽院で学んだ。

短い一生の中で数々の名曲を残し、日本の近代音楽の扉を開いた業績は永遠に輝き続ける。

Der in Japan hochverehrte Komponist Rentaro Taki (1879-1903) wohnte während seines Studiums am Leipziger Konservatorium der Musik von 1901 bis 1902 in dem nicht mehr erhaltenen Haus Ferdinand-Rhode-Str.7. Er war der erste japanische Musikstudent in Europa.

ライプツィヒ音楽軌道 ②音色の弧線コース

ライプツィヒ音楽軌道 ②音色の弧線コース



出典:ライプツィヒ観光局

1. ワーグナー生家跡
2. 旧劇場跡
3. マルシュナー旧宅跡
4. マーラー旧宅
5. ロルツィンク旧宅跡
6. シュルホフ旧宅
7. ブリュートナー・ピアノ工場跡
8. トーマス学校キャンパス／ルター教会
9. メンデルスゾーン音楽演劇大学
- ※9・10の近くに瀧廉太郎記念碑がある
10. 2代目ゲヴァントハウス・コンサートホール跡
11. アペルスガルテン・シナゴーク跡
12. ニキシユ広場・ニキシユ石碑
13. ゴットシェート通りシナゴーク跡
14. メンデルスゾーン像／トーマス教会
15. ワーグナー像



前述のライプツィヒ音楽軌道は3つのコースからなる。このうち、市の西部の音楽史跡を回れるのが「②音色の弧線 *Leipziger Notenbogen*」である。5.0キロのコースであり、歩いて2時間で回れる。以下の15のチェックポイントがあるが、こちらはまだ準備中である。

1. ワーグナー生家跡
2. 旧劇場跡
3. マルシュナー旧宅跡
4. マーラー旧宅
5. ロルツィンク旧宅跡
6. シュルホフ旧宅
7. ブリュートナー・ピアノ工場跡
8. トーマス学校キャンパス／ルター教会
9. メンデルスゾーン音楽演劇大学
10. 2代目ゲヴァントハウス・コンサートホール跡
11. アペルスガルテン・シナゴーク跡
12. ニキシユ広場・ニキシユ石碑
13. ゴットシェート通りシナゴーク（中央シナゴーク）跡
14. メンデルスゾーン像／トーマス教会
15. ワーグナー像

これらのうち、9. メンデルスゾーン音楽演劇大学については、すでに上でも紹介した。9と10の近くに前述の瀧廉太郎の記念碑がある

第4章 ライプツィヒ市 北部

次に、ライプツィヒの北部にある大学の建物をたずねよう。

<目次>

1 章	旧市街（リング内）
2 章	南東部 2－1．医学部・大学病院（ベイリッシャー広場駅） 2－2．自然科学系学部（ヨハンニスアレー駅） 2－3．精神科、獣医学部（ドイツ図書館駅）
3 章	南西部
4 章	北部

4 ライプツィヒ市 北部



ライプツィヒの北西部は、ローゼンタール地区という。まず、ここにある動物園内のヴォルフガング・ケーラー霊長類研究センターを訪ねる。

また、動物縁の北側にはゴーリス地区があり、詩人のシラーが住んだ家が残っている。

ライプツィヒ動物園

ライプツィヒ動物園

類人猿飼育研究施設 ポンゴランド



- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1. Chimpanzee indoor (group A) | 6. Bonobo outdoor |
| 2. Chimpanzee outdoor (group A) | 7. Orangutan indoor |
| 3. Gorilla indoor | 8. Orangutan & Gibbon outdoor |
| 4. Gorilla outdoor | 9. Chimpanzee indoor (group B) |
| 5. Bonobo indoor | 10. Chimpanzee outdoor (group B) |



12 番のトラムに乗り、動物園駅で下りる。中央駅から歩いて 15 分ほどである。

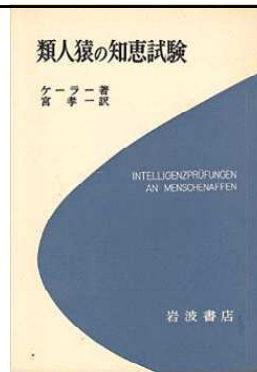
ライプツィヒ動物園は、1878 年に開園した長い歴史がある。しかし、ドイツ統一後の 1990 年代に、来園者が減り、閉園の危機に襲われた。しかし、2000 年「未来型」動物園として大改革をおこなって、持ち直した。例えば、檻をなくし、野生の生息環境を再現するサバンナを設けたり、ジャングルを再現した巨大な温室ドームを作った。また、類人猿館のポンゴランドでは、類人猿 4 種を飼育している。

ヴォルフガング・ケーラー霊長類研究センター

動物園の中にヴォルフガング・ケーラー霊長類研究センターがある。動物園の類人猿館ポンゴランドにおいて、類人猿の研究をおこなっている。このセンターは、前述のマックスプランク進化人類学研究所の研究施設でもある。動物園での霊長類の実験は、一般公開され、来園者はガラス越しに実験の様子を見ることができる。

ケーラーと洞察学習

ケーラーと洞察学習



チンパンジーの「洞察学習」の実験



出典: マックスプランク進化人類学研究所ホームページ

ヴォルフガング・ケーラー（1887～1967年）は、ゲシュタルト心理学の主導者として知られている。

『類人猿の知恵実験』（岩波書店）などの著書で知られるように、霊長類を対象にした心理学実験から「洞察学習」の概念を提示した。このケーラーの名前を冠したのがケーラー霊長類研究センターである。

ただし、ケーラーが実験したのは、テネリフェ諸島であり、ケーラーはその後シカゴ大学教授となった。ライプツィヒに住んだことはないようである。

森鷗外も訪れたゴーリス城

動物園の北側はゴーリスと呼ばれる地区である。ゴーリス地区には、ゴーリス城という小宮殿がある。1756年に立てられたバロック様式の市民邸宅であり、音楽家たちの社交や演奏会の舞台となった。

森鷗外は、ライプツィヒ大学に留学中の1885年6月に、ゴーリス城の中にあるブリュッヘル庭園を訪ねている。これは、ライプツィヒ大学医学部の助手をしていたアーノルト・シュミットとハインリッヒ・シュミットの送別会をするためだった。鷗外は1885年6月27日の『独逸日記』に次のように書いている。

諸生輩麦酒を喫す。其量驚く可し。独逸の麦酒杯は殆ど半「リイテル」を容る。而して二十五杯を傾る者は稀なりと為さず。乃ち十二「リイテル」半なり。余は僅に三杯を喫することを得。是を極量と為す。蓋し諸生輩の嘲笑を免かる可からざる者あり。

つまり、ドイツ人の同僚はひとり25杯のビールを飲んだというのである。25杯とは12.5リットルである。鷗外は3杯が限界であった。このためにドイツ人からからかわれたというのである。確かにドイツ人はビールを飲みすぎる。後に、鷗外はミュンヘンに移ってから、ビールの生理学的作用についての研究を始めるのである。

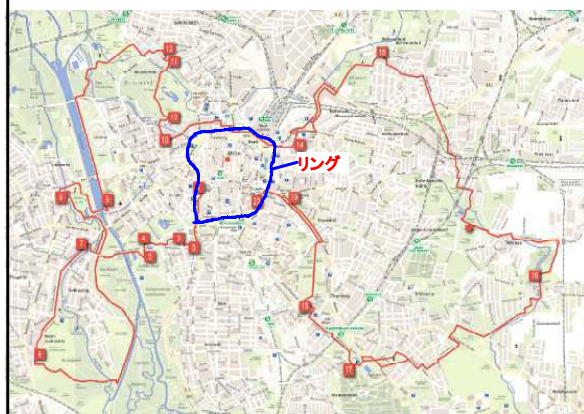
シラー旧居と『歓喜の歌』

ゴーリス地区は、詩人のシラーが住んだことでも有名である。現在でもシラーの旧居であるシラーハウスが公開されている。

詩人シラー（1759～1805年）は、26歳の時にライプツィヒを訪れた。当時の彼は生活に困っていたが、シラーの熱烈な支持者であったケルナーを頼ってライプツィヒに来たのである。ケルナーはライプツィヒ大学出身の法律家である。ケルナーたちは、当時のゴーリス村の農家の一室をシラーに提供した。シラーはその友情を讃えて『歓喜に寄す』という詩を書いた。この詩は、のちにベートーヴェンの第九交響曲の『歓喜の歌』として組み込まれ、世界中に知られることになる。

ライプツィヒ音楽軌道 ③音色の銀線コース

ライプツィヒ音楽軌道 ③音色の銀線コース



出典:ライプツィヒ観光局



1. 旧バッハ像／トーマス教会
2. 2代目ゲヴァントハウス・コンサートホール跡
3. メンデルスゾーン音楽演劇大学
4. シューベルト記念碑
5. リヒャルト・シュトラウス広場
6. クラインチョッハー荘園
7. ライプツィヒ印刷工芸博物館
8. 喜歌劇場《ドライリンデン館》
9. リヒャルト・ワーグナーの園林
10. シラー旧居
11. ゴーリス小宮殿
12. ツェルナー記念碑
13. マーラー旧宅
14. ハンス・アイスラー生家
15. シェーネフェルト教会
16. メルカウ荘園
17. 南墓地
18. ドイツ国立音楽資料館／ドイツ国立図書館
19. グラッシー楽器博物館
20. ゲヴァントハウス・コンサートホール

前述のライプツィヒ音楽軌道は3つのコースからなる。このうち、郊外にある音楽史跡を広く回るのが「③ライプツィヒ音色の銀輪 Leipziger Notenrad」である。こちらは40キロのコースである。地図に示した「リング」の大きさをみても、いかに広い領域を回るかがわかる。徒歩では難しいため、貸し自転車で回ることが勧められている。20カ所のチェックポイントがある。こちらもまだ準備中のようなのである。

1. 旧バッハ像／トーマス教会
2. 2代目ゲヴァントハウス・コンサートホール跡
3. メンデルスゾーン音楽演劇大学
4. シューベルト記念碑
5. リヒャルト・シュトラウス広場
6. クラインチョッハー荘園
7. ライプツィヒ印刷工芸博物館
8. 喜歌劇場《ドライリンデン館》
9. リヒャルト・ワーグナーの園林
10. シラー旧居
11. ゴーリス小宮殿
12. ツェルナー記念碑
13. マーラー旧宅
14. ハンス・アイスラー生家
15. シェーネフェルト教会
16. メルカウ荘園
17. 南墓地
18. ドイツ国立音楽資料館／ドイツ国立図書館
19. グラッシー楽器博物館
20. ゲヴァントハウス・コンサートホール

これらのうち、10. シラー旧居と 11. ゴーリス小宮殿、18. ドイツ国立図書館、19. グラッシー楽器博物館、20. ゲヴァントハウスについては、すでに上でも紹介した。

第5章 最後に

ライブツィヒ・ベスト3

最後にライブツィヒのアカデミック・ツアーのベスト3を選んでみよう。

1. 音楽軌道

ライブツィヒといえば、バッハ、メンデルスゾーンなど音楽の都。音楽にかかわる史跡を効率的に回れるのはうれしい。早く世界遺産になってほしいものである。

2. 日本人留学生

ライブツィヒにはこれまで多くの日本人が留学した。その意味で、日本とのつながりは強い。最も有名なのは、森鷗外、朝永振一郎、池田菊苗、滝廉太郎などである。その他にも、本論で出てきた人だけをあげても、井上哲次郎（巽軒）、松本亦太郎、桑田芳蔵、野上俊夫、野尻精一、金子馬治、川合貞一、塚原政次、千葉胤成、相良元貞などがいる。中には、滝廉太郎や相良元貞のように非業の死をとげた人もあり、そうした話を聞くのは心が痛む。当時の留学生は強い使命感を持ち、命がけで海を渡った。

3. 学問の発祥の地

数学、自然科学、医学、生理学など多くの学問がライブツィヒで花開いた。

とくに心理学の発祥の地であることは重要である。ウェーバーとフェヒナーにより精神物理学が完成し、ヴントはそれを心理学の基礎として体系づけて、心理学実験室を作った。その日をもって、心理学は哲学から独立した。世界中の留学生がヴントのいるライブツィヒ詣でをして、自分たちの国の大学に心理学を持ち込んだ。心理学の元をたどっていくと、ライブツィヒに行き着く。

○使用した写真は、出典を示していないものは自分で撮影したものである。

●元に戻る

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/>